問題　ストリキニアの用量如何

答　ストリキニアは常木樹の元素にして之が主衛効薬なり白色無味無臭の結晶にして三十二分の一より十二分の五一に至る

探點

答　未だ実験中の題にて改稿共に未熟なり故に容易なる問題を設く。拾答

理　拾答

化　数点四分を取り之を煮するに三分の蒸発に一分の酸素云々は蒸発の数少きに似たり五分中蒸発四分酸素一分なるべし

薬剤　四片の丸大黒を配するに共に適数なり然し大黒に比するよりは寧ろ少量に限まるは可ならん

処方　拾答

右の大答に付題答の使分を三答に分つ時は中答に位する者と看做し可給且迅に有之候

右に対する問申書

薬舗一名試験願出之者其筋所管より通知有之候ハ日迄立合試験者を差遣候間人数名並答之次第別記の通に有之候様発令御達則相成可給存候右御答六百八十四号御達に基き此段及問申候也

藥名の統一　従来薬品の名称は各國局方を各自勝手に反譯して附し全く不統一混雑極まりなく使用者販賣者共に痛苦に堪へざるものあり之に鑑み衛生局は之を統一すべく努力し先づ司薬場に命じて選定せしめたり是に對する上申書次の如し。

先般御答四百六拾號を以て薬名等記の依御達有之候付ては三所司薬場令議之末左何別冊之通取調候間御熟覧之上至急何分之御決議有之度此段申上候也

（別　冊）

名　称

一、ヨードカリーム
一、キニーネ
一、硫酸キニーネ、重硫酸キニーネ
一、塩酸キニーネ
一、枸櫞酸キニーネ
一、枸櫞酸鉄キニーネ
一、硫酸アトロピネ
一、吐根
一、吐根チンクツル（吐根丁幾）
一、吐根錠
一、吐根シールツプ（吐根合利則）
一、吐根酒
一、プロームカーリユム（臭素カーリユム）
一、硝酸銀、結晶、溶性
一、第一コロール汞（甘汞）
一、第二コロール汞（昇汞）
一、モルヒネ、酢酸、硫酸、塩酸
一、サントニーネ及其錠
一、ヂギタリス葉
一、苦扁桃水
一、ニーテル
一、アムモニア水（硼砂精）
一、コロラルヒドラート
一、揮発性硝酸亜鉛（硝酸ヒスミユット）
一、硝酸
一、硫酸キニーネ
一、鉄丘酸キニーネ
一、酢酸キニーネ
一、ストリキニーネ
一、硝酸ストリキニーネ
一、酢酸ストリキニーネ
一、アトロピネ
一、キナ皮
一、赤キナ皮
一、黄キナ皮
一、赤キナ皮
一、ラウリールケルス水
一、コロホルム
一、炭酸アムモニア

前記薬名は衛生局より三司薬場に通達せられ爾後一般に使用せらるゝに至りぬ。

藥名に和名の併記　輸入薬品は輸出國の名称のみにて販賣し居たりし故之に和名併記をなし取扱者の便を計る事に努めたり其第一歩として司薬場試験済の薬品には日本普通薬名又は直譯通俗名を併記する事を廣告したり。即ち次の如し。

和漢ノ薬品洋名ヲ以テ商標ヲ記シタルモノハ薬舗ニテ取扱ノ際失錯ヲ生ズベキニ付自今三所司薬場ニテ検査済ノ薬品ハ悉皆日本普通ノ薬名若クハ直譯通俗名ヲ商標ノ傍ラニ附加シ交付スベシ因テ之ヲ廣告ス

マルチンの解傭とブリユネの雇聘　司薬場草創の時に在りて多大の功勞ありしマルチンは満期解約せられたるを以て和蘭人ブリユネを新に教師として雇聘することゝなれり其間の記録次の如し。

當衛生局出張東京司薬場教師和蘭國人ドクトル・ゲ・マルチン俸年月三日雇満期に付解約致候様此段及御届申上候也

明治九年七月　　内務卿　大久保利通

太政大臣　三条実美殿

マルチン教師ノ賞與物品賞與

東京司薬場創立ノ際貴君之レニ来聘シテ始終勉勵ノ功少ナカラズ今期満チテ約ヲ解ク依テ其賞トシテ御カ別紙ノ品ヲ贈ル乞之ヲ領収セヨ。

明治九年七月二十五日　　内務卿代理　内務少輔　林　友幸

ドクトル・ゲ・マルチン君殿下

目録

一金三百圓

明治九年十一月より三ヶ年間の契約にて和蘭人ドクトル・ペ・セ・プリュヘを教師として雇入れ其住居として司薬場構内教師館を與へたり。次に掲ぐるは外務省の雇入證票なり。

第千五百廿二號

内務省衛生局仕

和蘭人ドクトル、ペ・セ・プリュヘ

Dr. P. C. Pluggy.

住所　東京司薬場構内

職務　諸薬品試驗

給料　一ヶ月金四百圓

期限　明治九年十一月廿九日ヨリ三ヶ年

右ノ通相違無之事

但仕官差止候節ハ此證票返納之事

明治十年一月十一日

外務省印

司薬場試薬師の制定　明治九年四月司薬場試驗掛を廢し一等より十等に至る試薬師を置くことゝなれり。其俸給は左の如し。

一等試薬師	自百五十圓 至百二十五圓	六等試薬師 自四十二圓 至三十四圓
二等試薬師	自百 至百 二十圓	七等試薬師 自三十 至二十五圓
三等試薬師	自九十 至七十五圓	八等試薬師 自二十 至十七圓
四等試薬師	自七十 至六十圓	九等試薬師 自十 至十一圓
五等試薬師	自五十 至四十五圓	十等試薬師 自十 至六圓

司薬場の事務規程に關する達　司薬場は開場以來薬品の檢査、薬舗傳習生の養成、飲料水の試驗等衛生所管廳としての規模略ぼ整ひたるを

以て茲に内務省は司薬場事務條件として次の如き事務規程を布達せり。

司薬場事務條件

第一條　薬物ヲ試驗シテ其眞贋精粗ヲ檢明スル事

第二條　最寄地方ノ鑛泉飲水等ヲ分析シ其性質及ヒ成分ヲ檢明スル事

第三條　薬舗及製薬家等志願ノ者ニ製薬法試驗法等ヲ傳示スルコト

第四條　臨時薬舗ヲ巡視シ非劇薬取扱方ヲ點見指示スル事

明治九年十二月六日　内務卿　大久保利通

京都司薬場廢止と横濱及長崎司薬場の開設　京都司薬場は開場以來僅々一年有餘にして次の内務省布達に依りて廢止せられ新に横濱及長崎の二港に新に司薬場を開設せらるゝに至りぬ。其間の事情は内務省衛生局第二次年報に明かなり。即ち次の如し。

内務省布達（明治九年八月十二日甲第三二號）

今般詮議ノ次第有之京都司薬場相廢シ横濱、長崎二港（司薬場設置候條此旨布達候事

但開場ノ儀ハ追テ布達可致事

（備考）（内務省衛生局第二次年報抄錄）

明治九年八月京都司薬場ヲ廢シ更ニ横濱、長崎ノ兩港ニ設置ス先是大阪司薬場ノ事業日ニ擴張シ京都ニ入ル所ノ薬品多クハ既ニ大阪ノ檢査ヲ經ルヲ以テ京都司薬場ニ就テ請フ者漸ク少ク而シテ横濱ハ輸入ノ咽喉ナルニ替テ檢査ノ畢ナキヲ以テ薬品ノ賣買大ニ澁滯スヘク長崎ハ終ニ各地ノ司薬場ニ於テ淘汰セル腐敗品ノ需給トナルヘキ虞アルヲ以テ此ノ處置ニ及ヘリ。

右布達により内務省は同年十月内務十等出仕直井延吉を横濱司薬場長心得とし事務取扱を命じ元京都司薬場教師ドクトル・アイ・セ・ゲールツを教師に招聘し横濱市仲通舊伊國領事館を譲受け之に諸般の營繕を加へ且器械の据付をなし翌明治十年四月内務省布達甲第九號を以て其開場を布告し五月開場式を擧げたり。

又長崎司薬場は長崎市新橋町寺町角に設立され場長に辻岡精輔を命じ和蘭人ドクトル・イ・エフ・エーキマンを試薬監督に招聘し明治十年十一月内務省布達第二十四號を以て開場したり。

依頼試驗手數料徴收の手續の制定　司薬場は開設以來專ら製薬品取締に努め民間より依頼せる薬品の眞贋鑑定は無料にて行ひ來りたるも今

や外國との交易日に繁劇を加へ外人の藥品、鑛石及鑛泉等の試驗を依頼するもの益々多きを數ふるに至りしを以て外國人の依頼試驗に對しては相當の手數料を徴收することゝなれり之に關する文書を示せば次の如し。

衛生局ヨリ東京司藥場へ達（明治九年八月十七日）

外國人ヨリ藥品、鑛石、鑛泉等試驗依頼申出候節ハ試驗ノ難易試藥消耗種々多少ニヨリ相當ノ手數料可受取此段相達候事

但手數料ノ儀ハ最初相示シ試驗取計可申且該金ハ其都度明細書相添當局ヘ上納可致事

衛生局ヨリ大阪司藥場へ達（明治九年八月日闕）

先般明届置候外國人ヨリ藥品鑛石鑛泉等試驗依頼ノ節受取候手數料ノ儀ハ其都度明細書相添當局ヘ上納可致此段更ニ相達候事

外國人出願藥品等檢査手數料ニ關シ内務省ヨリ東京大阪横濱長崎司藥場ヘ達（明治九年十一月八日）

外國人ヨリ藥品檢査出願候節ハ別紙ニ照準手數料收入可致旨相達候事

檢査手數料品目

第一　自然藥物及滋養物ノ理學的單純鑒定　金四十錢

第二　自然藥及粉類ノ理學的檢査ニ兼ネテ顯微鏡ヲ使用スルモノ　金一圓

第三　製煉醫藥及ヒ飲水ヲ檢査スルニ定性法ヲ以テ其二三ノ成分ヲ鑒別スルモノ　金一圓

第四　許多ノ成分ヲ含メル飲水、鑛物及金屬類ノ定性分析檢査

第五　試驗藥、醫藥、鑛物、金屬及水類ノ各成分ヲ詳カニスルコトヲ要シ其精密定性檢査ノ容易ナルモノヨリ至難ナルモノ　金五圓乃至十圓

第六　化學上醫藥鑛物及鑛物中ノ一成分ノ定量檢査ヲ要シ其容易ナルモノヨリ至難ナルモノ　金參圓乃至十圓

第七　試驗藥鑛物、水、鑛物中二、三成分ノ定量檢査　金十圓

第八　鑛泉、鑛物、醫藥等ノ精密ナル定量檢査ヲ要スルモノニテ其容易ナルモノヨリ至難ナルモノ及時間ヲ費スモノ　金十五圓乃至百圓

右ノ通手數料相定ムルト雖モ一時ニ許多ノ見本多量ノ化學上醫藥及寶物ヲ檢査スルニ當テハ定價百ニ付十乃至二十ヲ減スヘシ

内務省ヨリ外務省ヘ通牒（明治九年十一月八日）

外國人ヨリ當省所轄司藥場ヘ藥品其他分析檢査願出候節ハ其品質ニ應シ別記ノ通手數料收入可致候條此段爲念及御通知置候也

（別紙省略）

衛生局ヨリ内務省ヘ伺（明治九年十一月日闕）

外國人ヨリ藥品其他檢査出願候節ハ自今左ノ手續ヲ經テ手數料ヲ先納スルニ非サレバ試驗セサル樣致度候不然ハ徒ニ煩雜ヲ釀シ可申候條此段至急御決議相伺候也

（左記省略）

外國人出願藥品等檢査手數料改正ニ關シ東京、大阪、横濱、長崎司藥場ヘ達（十二月二十八日）

過般相達候外國人出願ノ藥品其他手數料表別紙ノ通改正候條英字譯文相添此旨相達候事

別紙

檢査手數料品目

第一　自然藥、鑛物及滋養物ノ理學的單純鑒定　金四十錢

第二　自然藥及粉類ノ理學的檢査ニ兼ネテ顯微鏡ヲ使用スルモノ　金一圓

第三　製煉醫藥及飲水等ヲ檢査スルニ實地法ヲ以テ其二三ノ成分ヲ鑒別スルモノ　金一圓

第四　製煉醫藥及ヒ飲水等ヲ檢査スルニ定性法ヲ以テ其三以上ノ成分ヲ鑒別スルモノ　金三圓

第五　製煉醫藥、飲水、鑛物等ノ精密ナル定性檢査　金五圓乃至十圓

第六　製煉醫藥、鑛物等ヲ檢査スルニ定量法ヲ以テ其成分ヲ鑒別スルモノ　金三圓乃至五圓

第七　製煉醫藥、鑛物等ヲ檢査スルニ定量法ヲ以テ其二三ノ成分ヲ鑒別スルモノ　金十圓

第八　鑛泉、鑛物、醫藥等ノ精密ナル定量檢査ヲ要スルモノニテ其容易ナルモノヨリ至難ナルモノ及時間ヲ費スモノ　金十五圓乃至百圓

右ノ通手數料相定ムルト雖モ一時ニ許多ノ見本多量ノ自然藥、製煉醫藥及寶物ヲ檢査スルニ當リテハ定價百ニ付十乃至二十減スヘシ

製藥免許手續の制定　政府は疾きに藥品販賣に從事する藥舗開業者の資格を制定したるも茲に免許製藥人なるものを生じ然かも其の製藥は多くは輸入藥品に模擬したる低級の競爭品なるを以て政府は製藥者取締の規定を設くるの必要を生じたり。即ち明治九年五月左の如き布達を發し製藥免許手續を定めたり。

製煉藥品ノ儀ハ本邦ニ於テ往々舶來品ニ勝レル良品モ有之處只管輸入品ヲ妄信シ概シテ國產ヲ卑シムノ風ニ流レ腐惡藥ノ輸入日ヲ逐テ增加シ其損害不尠ニ付自今製造品試驗ノ上其良否ヲ鑒定シ免許鑒札相渡スヘク候條藥舗用、工職用ヲ不問藥品製煉致シ候者ハ其製造品相添左ノ箇條書ニ從ヒ届出許可ノ上販賣致候樣可取計此旨相達候事

但同井製造人ノ儀ハ詮議ノ次第有之候條當分地方限リ明届置昨八年當省乙第百五十六號達ニ照準シ可取計事

一、製藥人ハ族籍、住所、姓名等詳記シタル願書二通ヲ作リ其製品ヲ添ヘ管廳ヘ出サシメ管廳ハ之ニ添書シテ内務省ニ出スヘシ

一、製品ハ各地ノ便宜ニ就キ最寄司藥場ニ送致シ試驗ヲ受ケ其譯添書ニ進申スヘシ

一、試驗ノ上良品ナルモノハ免許鑑札ヲ交付シ若シ其製造十全ナラサルモノハ本人ノ志願ニヨリ司藥場ニ於テ製煉ノ方法傳示スヘシ

一、製藥許可ヲ得タルモノハ官許ノ文字ヲ冒シタル商標ニ藥名及其住所姓名ヲ記載シ每器ニ貼シ販賣スヘシ

但藥名ハ國字洋文兩樣共記載スルハ勝手タルヘシト雖モ洋文ソミヲ書アヘカラス必ス普通ノ譯名或ハ譯名無之モノハ假名ニテ原名ヲ記スヘシ

一、製藥品ニ司藥地檢査印紙ヲ貼シ庶衆ノ者ハ取調衛生局（排下願出シムベシ（鑑札雛形略）

明治十年の虎疫大流行と石炭酸の製造　明治十年西郷隆盛鹿兒島に兵を起し進んで熊本鎭臺を攻む。熊本城急を告げ政府は之が救援鎭定に全力を傾注せざるべからざるに際し支那厦門に起りたる虎疫は我國に傳播し各開港地を始め殆と全國に猖獗を極め其勢猛烈にして終想測るべからず事遂に天聽に達し　聖上いたく宸襟を惱し給ひ諸官員にコレラ豫防藥の御下賜あり場員一同も亦拜受の光榮に浴し感激おく能はず疲食を忘れ防疫に努力せり。當時唯一の消毒藥たる石炭酸は戰亂と流行病と之に投機者流の乘ずる所あり其價格暴騰し防疫に支障を來し人心恟々たるに至りぬ。玆に於て政府は司藥場に石炭酸並コレラ豫防藥の製造及消毒代用藥の調査を命じ同時に石炭酸の販賣を地方廳限りとして其普及の迅速を計れり。此間の消息を示す文書次の如し。

當日コレラ藥二十八瓶並効能書御添官内省ヨリ下賜相成候條御廻申候ニ付御領收證御送付有之度候也

明治十年十月十日

東京司藥場御中

衛生局

本省官員並其他諸官省ヘ虎列剌病用意丸藥御渡可相成候ニ付テハ差向一萬包モ調製不致置テハ不相成就テハ御場事務煩劇之際御都合モ有之候ヘ共可成差繰ヲ以御調製有之度此段及御照會候也

明治十年十月廿九日

東京司藥場御中

衛生局

達（明治十年九月二十七日第六十九號）

石炭酸並ニ硫酸ハ劇藥ニ付本年二月第二十號毒藥劇藥取扱規則ヲ以テ妄リニ販賣不相成旨及布告置候處流行病有之節ニ限リ五十倍以上ノ水ニ溶解シタル分及ヒ他ノ藥物ト混和調製シタル分ハ地方官廳限リ販賣差許此旨相達候事

前述の如く石炭酸の製造は今や焦眉の急を告げたるを以て東京司藥場に於ては直ちに七等試藥師村田春齡を製造主任に命じ其完成に努力せしめたる結果遂に其精品の製出に成功し晝夜兼行を以て製造に努め其需要に應じ防疫上多大の功獻を致せり。

其製造法の解說として當時發表せられたる記錄の一部を抄錄すれば次の如し。

明治十年虎列剌病大ニ流行シ石炭酸ノ需用遽カニ增加シテ其價非常ニ騰貴シ又殆ト缺乏ニ至ラントセリ是ニ於テ東京、横濱兩瓦斯局ヨリ炭賦ヲ購求シテ石炭酸製造ニ着手ス抑々歐米諸國ニ於テ炭賦ヲ蒸餾スルハ主トシテ彩色料ヲ製出スルニ在リテ石炭酸ノ如キハ只其旁生物ノ一タルニ過キス然レトモ彩色料ノ事ニ至リテハ敢テ本局ノ要スル所ニアラサルヲ以テ炭賦ヨリ石炭酸ノ製法ヲ記シテ解說ノ一班ト爲スコト左ノ如シ

第一、炭賦、東京及横濱ノ瓦斯局ニテ光瓦斯ノ製スルノ時ニ方リテ副成スルモノヲ用フ

第二、蒸餾油、炭賦ヲ蒸餾シテ最初ニ水ヲ蒸去シ繼キテ得ル所ノモノニハ輕重ノ二油ヲ混淆ス

第三、粗製石炭酸、前ノ二油ニ曹達滿ヲ加ヘ揮發油ト分離セシメテ石炭酸曹達ト爲シ又硫酸ヲ注キ曹達ヲ分離シテ之ヲ得尙ホ種々ノ他質ヲ含有セルヲ以テ粗製ノ名ヲ命ス

第四、精製石炭酸、粗製石炭酸ヲ再餾シタル液中ニ苛性石灰ヲ混和シ更ニ蒸餾シテ之ヲ得タリ

第五、結晶石炭酸、精製石炭酸ニ苛性石灰ヲ加ヘ大氣ニ曝スコト數日間ノ後之ニ水ヲ加ヘ含有ノ「ナフタリン」ヲ分チテ上清液ヲ取リ又硫酸ヲ注キテ全ク遊離セシメ更ニ蒸餾シテ含ム所ノ「クレシール」及ヒ水分等ヲ除キ之ヲ沸騰點ノ温ニ煖メ乾燥セル大氣ヲ通シテ結晶セシメタリ

告示第其他規則の制定　明治十年一月告示第の規定を設けられ同年二月毒藥、劇藥取扱規則の發布を見、更に同年三月試藥場試驗條令を改正され同年四月には試驗檢査印紙の改正あり、同年六月には更に藥名第に場印を押捺することを定められ續いて同年十月には試驗濟端物に最目不足の印を押捺すること等連續的に諸法規、手續等を規定されたり。

東京大阪横濱長崎司藥場ヘ達（明治十年一月九日）

禁藥用並不適藥用ハ自今印紙貼附ノ外更ニ別紙告示第ヘ其藥瓶ノ商標帳簿ノ番號及藥用ヲ許ササル因由等和洋兩文ヲ以テ記入シ場印教師記名及試藥師ノ記名調印ヲナシ交附可致此旨相達候事

横濱司藥場ヨリ衛生局ヘ伺（明治十年六月十四日）

檢査願出藥品ヘ總テ和名札貼付ノ節自今別紙朱書ノ如ク捺印致シ下ケ渡候節ハ幾分ノ取締ニモ可相成候間此段至急相伺候也

NAIMUSHO,

BOARD OF PUBLIC HEALTH

Imperial Japanese Pharmaceutical Laboratory Report.

Shinji

Signature.

The undersigned declares that the medicine, bearing the label.....

and registered at the Laboratory with No.
can not receive the Laboratory's label of pharmaceutical purity on account of.....

sealed by

此内彩紋

彩紋畧之

試験師に業任制生等外の階級制定　明治十年四月試験師を一等より二等迄は業任、三等より九等迄は制任、十等を等外官に準し取扱ふことゝなりたり。

製薬學教場の廢止　從來各司薬場に於て製薬學教場を設けて生徒を教育したるも明治十年六月より之を廢し試薬師助手等の者にして修業講義を受くる程度としたり。其製薬日誌を示せば次の如し。

試薬師以下製薬日誌

一、月　日　　午前八時半より十時迄　　共通化學

内務省ヨリ東京、大阪、長崎司薬場ヘ達　（明治十年六月十八日）

後差廻ス薬品ハ所行ノ薬名並ニ製印幷ニ後製造司薬場ヘ別紙ノ通指令相成候ハヽ名称薬品等好成効ノ一種トモ相成ニ付自今其場ニ於テモ右ニ準御取扱可申之此段及通達候也

尚又試験薬品の所謂雑物中往々容疵不足の物あり延々紛雪を生ずる處あり是が對策として衛生局は司薬場に對し是等の薬品に容疵不足の旨の捺印すべき事を達し其印章を送附し此旨日刊新聞にも亦廣告せり。即ち次の如し。

衛生局ヨリ東京、大阪、長崎司薬場ヘ達　（明治十年七月十日）

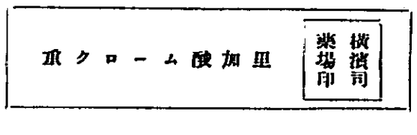
後差廻ス薬品中其容疵多シク減却或店候モノ往々有之趣右ハ薬瓶或紙等ヨリ不得止減疵候モ可有之候得共或ハ試験上ノ減疵ヲ口實トシ指返スル等ノ虞モ有之ニ付自今試験トモ該瓶ノ商標及製名票ヘ容疵不足ノ印ヲ捺シ可下附依テ右印章相渡此段相達候事

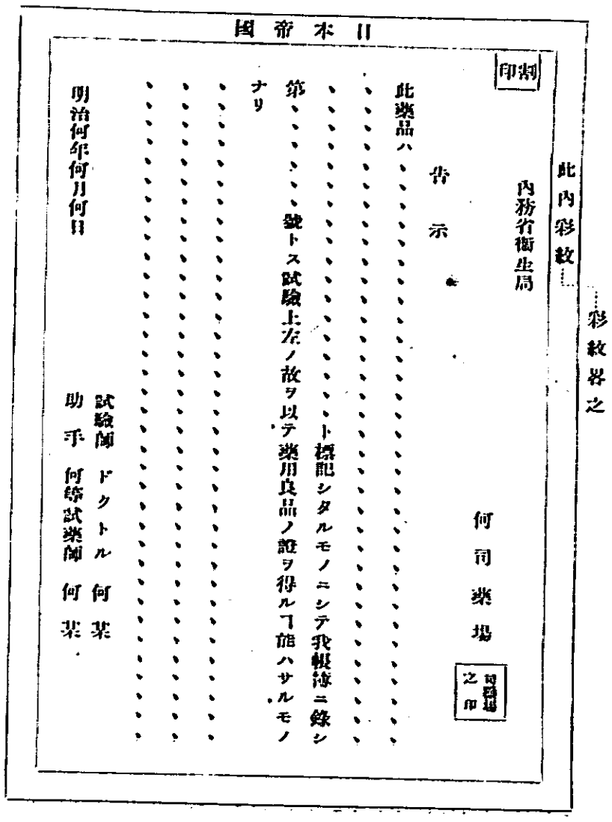
但日報、報知、朝野、呼、醒寳、但名、総人ノ七社新聞紙ヘ左記ノ通改令報廣候條諸心得此段相達候事

記

第廻ス試験司薬場ヘ後差廻ス薬品ノ内ニハ多シク容疵ノ減少セルモノアリ（即チ雑物）此ノ如キ品類ニハ今後製造トモ該瓶ノ商標並製名票ヘ容疵不足ノ四字捺印シテ取付ス販売スル者立ク注意スベシ

此旨廣告ス





一、火曜日　同　　同
一、水曜日　同　　同
一、木曜日　同　　分析化學
一、金曜日　同　　製藥化學

明治十年六月九日

而して十一年十一月より東京司藥場講義課程中衛生學の大意にして實際施行の照考ともなるべき一科を加へたり。

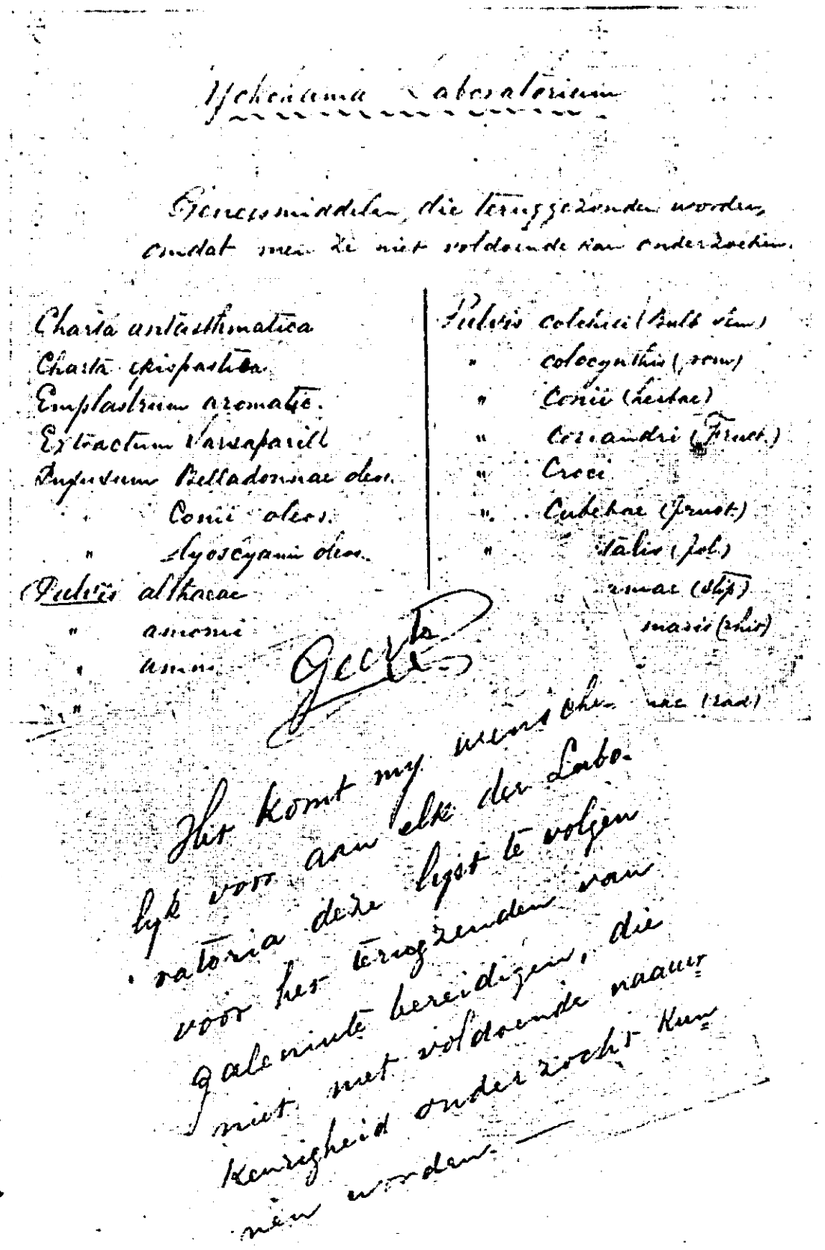
ゲールツの上申書と試驗拒否藥品の制定　明治十年六月には横濱司藥場教師ゲールツは藥品試驗につき調査の結果生藥製劑等にして其純雜判然し難き藥品喘息紙外多數の藥品を指定し其等藥品の試驗を受理せざる樣取計られ度き旨衛生局へ上申したるに之を採擇せられ各司藥場へ其旨通知せられたり。

ゲールツの上申に基く試驗拒否藥品名次の如し。

喘息紙、發泡紙、芳香、硬膏、撒爾沙越幾斯、莫芬油浸、尖鳩答油浸、菲沃斯油浸、亞爾答根末、アモミ、末安謨尼亞護謨末、白芷根末、安倫斯鵬刺皮末、亞爾尼加根及花末、芳香末、芠根末、亞沙利末、牛乃根末、莫芬根末、弱筒藥末、加刺枝爾亘末、格倫僕末、白桂皮末、益智子末、カルシユキヘネシクト末(草)、加斯加栗刺皮末、加密列花末、桂皮末、格兒尖扁蘖及子末、格疎蘖篤末、尖鳩答草末、胡孛子末、コロシキ末(草)、巢體茄實末、實芝答利斯葉末、蜀羊泉末、綿馬根末、瓦爾枝奴蘖、鍵質亞那根末、土木香根末、蒜梨蘆根末、吐根末、拖歇爾斯散、伊里斯弗魯連底那根末、ユクランシス葉末、若蘓末、菲性蒿、苣葉末、落別利亞末、麻尖斯末、ヘルラントリーアクニアト、遠志根末。括尖亞末、刺答尼亞根末、撒枝實兒刺實末、薩毘那葉末、接骨木花末、撫綿施那末、沙保那利亞末、撒爾沙根末、薩沙布羅斯末、蘇甘設扭根末、海葱根末、麥奴末、遠志根末、游那葉末、撫爾扉答里亞根末、亞瑪爾枝皮末、曼陀羅花草末、蒲公英根末、實芝答利斯含利別、吐根含利別、阿片含利別、罌粟殼含利別、大黄含利別、複方撒爾沙根含利別、遠志含利別、游那含利別、亞爾尼加丁幾、蓋苔丁幾、莫芬丁幾、弱筒丁幾、格倫僕丁幾、印度大麻丁幾、益智子丁幾、加斯加栗刺丁幾、葛斯篤僕蘖丁幾、實芝苔利斯丁幾、吐根丁幾、菲性蒿苣丁幾、落別利亞丁幾、麻尖斯丁幾、括尖亞丁幾、刺苔尼亞丁幾、大黄丁幾、薩毘那丁幾、遠志丁幾、曼陀羅花丁幾、吐根錠、芳香酒、格兒尖扁蘖酒、吐根酒、海葱酒。

尚ほ藥品試驗受理に關し衛生局は同年七月局方外藥品、罰則外藥品と雖も化學藥品の試驗は極力受理せしめんとしサリシル酸他三十一種を指定して其調査を命じたり。

檢査頒用藥品ノ僞偏ニ局方之掲載ノ有無ニ據リ受不受之處分ニ及ヒ例之ハ硫酸シンコニーネ」ノ局方ニ記載アルヲ以テ受理スルト雖モ硫酸シンコニーネ」ハ



ゲールツ自筆上申書の一部

掲載無之カ爲ニ受理セサルカ如ク徒ラニ局方ニ拘泥シ其物質ノ如何ヲ顧ミサレハ或ハ有用ノ薬物ヲ廢物ニ屬シ薬物境界ヲ隘ムルニ相當リ候ニ付苟モ化學的抱合ニ成リ醫薬用ニ適スヲ可ク認ルモノハ局方内薬品之通試驗取扱度事ト存候條豫メ局方外薬名ノ受理ス可クト存候モノヲ概略別紙之記載書送候筈ト教師初メ御協議ノ上亘和至急意見御申越有之度此段及照會候也

明治十年七月十九日

東京司薬場殿

衛生局

別紙

一、サリシール酸
二、醋酸キニーネ
三、醋酸ストリキニーネ
四、アポモルヒネ
五、アミグダリン
六、臭素鉛
七、ブルシネ
八、カンタリヂネ
九、キニヂーネ
十、シンコニーネ
十一、枸櫞酸鐵アモルフキニーネ
十二、枸櫞酸鐵シンコニーネ
十三、結晶ヂキタリーネ
十四、純エメチネ
十五、沃化アンモニューム
十六、沃化亞鉛
十七、鹽酸シンコニーネ
十八、鹽酸ストリキニーネ
十九、鹽酸アポモルヒネ
二十、ベプシングリセリン
二十一、乳酸ナトロン
二十二、乳酸苦土
二十三、乳酸亞鉛
二十四、ナルコチネ
二十五、ピペリーン
二十六、燐酸苦土
二十七、キニューム
二十八、酒石酸ナトロン
二十九、酒石酸苦土
三十、コロール醋酸
三十一、蘚草酸アトロピネ
三十二、蘚草酸モルヒネ

佛國より薬草種子の輸入 佛國より衛生局宛送附の薬草種子を司薬場に於て栽培方依囑せられたり衛生局よりの添書及種子名次の如し。

今般博物局へ佛國薬草種子族同清ニ付少許宛二十五種分配ヲ受候右ハ其場構内へ植附置候ハハ試驗上照覆ニ便ナル儀モ可有之ニ付及送附候御領收有之度候

明治十年七月十九日

衛生局

東京司薬場御中

種子族名

(1) Colchicum Autumnale
(2) Marrubium vulgare
(3) Juniperus Sabina
(4) Melissa officinalis
(5) Cuminum Cuminum
(6) Capparis spinosa
(7) Carum Carvi
(8) Vinca minor
(9) Tussilago Farfara
(10) Convolvulus Scammonii
(11) Momordica elaterium
(12) Bryonia dioica
(13) Cucurbita pepo (Coloquinte)
(14) Gentiana lutea
(15) Veronica officinalis
(16) Rhus toxicodendron
(17) Ferula galbaniflua
(18) Laurus nobilis
(19) Mimosa Julibrissin
(20) Eucalyptus rostrata
(21) Ilex aquifolium
(22) Robinia pseudo-acacia
(23) Pimpinella anisum
(24) Aristolchia clematis
(25) Majoraine

飲料水及凍氷等に對し衛生的注意喚起 明治十一年川路警視は衛生局長に凍氷試驗方願出でたり依て衛生局は東京司薬場をして凍氷の試驗を施行せしめたり。而して氷の需要は年々歳々增加し隨て其製造人各地方に增加し是等の内には土地及氷質の清汚を問はず水田沼地等至る處に冬期之を製造し需要期に販賣するもの少なからずコレラ流行時等に於ては飲料水と共に衛生上最も注意を要すべきものなるを以て司薬場は次の上申書を提出し衛生上多大の貢獻を致し明治十一年九月二十日以後に於ては製氷營業者は毎歳製氷の初及翌年發賣の際豫め管轄廳の檢査を受け然る後發賣すべき事を布達されたり。

凍氷試驗依頼書

凍氷分析云々之儀乘テ御依頼候末司薬場係員現場出張分析方施行相成本日迄漸ク一ケ所丈相濟候然ルニ尚此他十六ケ所有之之ヲ一日一ケ所宛分析相成候テモ尚日數十六日不經ハ不相濟候ニ付テハ氷主共ヨリ許可ノ有無日々致催促事情尤ニ相聞候間該場御都合モ有之御迷惑トハ存候ヘ共向後ハ日曜日ヲ除ク外晴雨ニ不拘日々出張分析相成候樣此際分テ該場ヘ御達相成度此段及御依頼候也

明治十一年七月二日

衛生局長殿

川路大警視

凍氷に對する意見書

本年七月以來警視局大警視ヨリ本局長ニ依頼ノ凍氷試驗之儀其都度警視本署之招ニ應シ試薬師ヲ派出シ或ハ製造人ヨリ直々出張ノ分モ詳細試驗ヲ遂ケ候處今

般別紙之通り成績表調製ニ付其狀致候筈ナハ最早本年モ製氷之時期ニ迫リ候處來年夏日ニ至リ其已ニ製成スルモノヲ試驗候樣ニテハ許多ノ費訊ヨリ試驗ノ手數ニ日數ヲ費シ毎々氷室ヲ開キ暑熱ニ融消シ破產ニ至ルモノ亦往々之レアルヘク夏氷ノ利益アルハ今更其陳ニ及ハス是ヲ以テ成丈ケ製造人多クシテ其價ノ廉ナルコト歐洲諸大都ノ如クナラシムルハ實ニ衛生上ノ一要務ニ有之候間豫メ製造注意之件御布達或ハ廣告シ其製造所ハ前以テ出願致サセ其筋ヨリ檢査シ已ニ成ルモノハ府下ニ運輸シ一應醫務吏ノ檢分ヲ受ケ汚穢ノ貯藏等無之上ハ速ニ販賣許可相成候ハヽ大ニ人民ノ便益ニモ可有之候ニ付御布達參照ノ爲左ノ製造注意ノ件々上申仕候也

一、氷ハ夏日一時ノ渴ヲ防クノミナラス疾病上需用スル所多ク且洗滌ヲ用キスシテ直ニ之ヲ服用スルモノナレハ極テ清潔ナラスンハアル可カラス

二、氷ヲ製スルニハ清水ヲ擇フヲ本旨トス之ヲ以テ泥沼等ノ如キ不潔ノ發氣多キ土地或ハ人家稠密或ハ田間ノ流潴或ハ礦坑火山近旁等ノ流水ヲ用フヘカラス

三、製氷場ハ極テ清潔ヲ主トス故ニ務メテ砂石ヨリ成ル所ノ土地ヲ擇フヘク否ナレハ氷池ノ周邊ハ石垣又ハ木柵等ニテ圍ヒ池底ハ砂礫ヲ埋メテ糞土ノ流入塵泥ノ浮遊ヲ防クヘシ

四、結氷中尤モ禁忌スヘキモノハ有機物ナリ故ニ糞土塵泥ノ外草木幹葉等水中ニテ腐敗シ易キモノヲシテ混入セシムヘカラス

五、製造人ノ不注意ヨリ草粧土足ニテ氷上ヲ踏跡シ爲メニ氷塊ヲ汚泥スルモノハ縱ヒ水質美ナリト雖モ飲用ニ供スヘカラス

右之外製造貯藏ニ至ルマテ務メテ清潔ヲ主トシ汚穢ノ取扱無之樣注意シ製造所ハ標成ノ上地方衛生吏ノ檢閱ヲ受クヘキナリ

明治十年の虎疫の大流行により凍氷飲料水の衛生上極めて重視すべきものなること漸く世人の注意を喚起するに至り翌十一年政府は飲料水注意書を發表して其衛生的指針を示し東京司藥場は又警視廳の依囑によりて東京府下の井水試驗を施行せり。其間の消息を示せば次の如し。

飲料水注意法　（明治十一年五月乙第十八號）

不潔ノ水ヲ飲料ニ用フル時ハ人身ノ健全ヲ害スルハ勿論ニ候處從來都下ノ風習ニテ粗造ノ井戸側ヲ用ヒ或ハ甲板下水ノ設ケナク或ハ下水ノ設アルモ頗ル接近スルヲ以テ溜滯ノ汚水自然井中ニ滲入シ爲メニ水ノ水質ハ變換スルノ患害不尠就中傳染病ノ流行ノ際ニ於テ最モ忽ガセニス可カラサル儀ニ候條自今共同私有ノ別ナク別紙飲料水注意法ニ照シ新調又ハ補理候樣無遺漏各自ヘ懇篤可諭達此旨相達候事

但時々警視官吏巡回實地檢査ニ可及候事

一、井側ノ破壞シテ汚水ノ滲透スルノ患アルモノハ速カニ新調スヘシ

一、井戸流シノ大破スルモノハ新調シ其小損スルモノハ板及亞土等相應ノモノヲ以テ精密ニ塞ヘスヘシ

一、凡ソ井戸ニ下水ナキモノハ新ニ造ルヘシ但シ下水ハ能ク水ノ流通スル樣注意スヘシ

一、從來地形ノ不便ニ依リ他ノ所有地ヲ經サレハ井下水ヲ開設シ難キ場所ハ双方地主協議ノ上取設クヘシ若シ又道路等官有地ニ交渉スルモノハ府縣ノ檢査ヲ乞ヒ指圖ヲ受クヘシ但井戸ノ新設セントスル時本項ノ場合アルニ於テハ前以テ協議ヲ盡シ著手スヘシ

一、前項ノ場合ニ於テ事情不得已者ハ當分汚水溜ヲ設ケアルモ妨ケスト雖モ井戸ヲ距ルコト二間以上タルヘシ但地所狹隘ニシテ二間以内接近セサルヲ得サル場合ハ板又ハ亞土等ヲ以テ汚水ノ漏レサル樣ニスヘシ

一、井戸ヨリ三間以内ハ厠厄ヲ作ルヘカラス但現在設置ノ分ト雖モ修繕等アル毎ニ本文ニ準スヘシ

一、井戸近傍ニ於テ糜爛虎子等汚穢ノ物品ヲ洗滌シ及魚鳥ノ骨腸等ヲ棄ツヘカラス

一、呼ヒ井戸ノ井管破損スルト認ムル時ハ速カニ之ヲ補理スヘシ

一、上水井ニ於テハ汚濁且塵埃等アルカ又ハ臭氣ヲ含ムモノアラハ速カニ府廳又ハ該區務所ヘ調査ノ義申出ツヘシ

一、毎年少ナクモ一度ツヽ井戸浚ヲ爲スヘシ

明治十年府下井水試驗手續ノ概略

一、明治十年井水試驗ノ義ハコレラ病流行ノ際ニ際シ東京府廳ノ依囑ニ應シ目下ノ急ヲ救フヲ主トシ倉卒齊手間ヨリ精密ヲ要スルニ遑アラス且飲水ノ禁許ハ容易ナラサル大事件ニ付只有害物ノ最ナルモノヲ檢査シ極惡水ニ至テハ亦普通ノ利害ヲ總論スルノミナリ

一、府廳ヨリ官吏一人ニ小使一人ヲ從ヘテ派出セシメ別ニ雇夫二人ヲシテ諸器械ヲ運搬セシム當場試藥師二名小使一人派出ス府員ハ區戸長ニ面話シテ相與ニ試藥師ヲ先導スルヲ掌リ小使ハ日常要需ノ使役ニ供ス試藥師ハ其地ニ就キ其近傍ノ汚穢ヲ檢査シ注意ノ要趣ヲ說諭シ已レノ小使ヲシテ井水ヲ汲取ラシム是レ其平日器械ノ洗滌ニ注意スルヲ以テナリ既ニシテ之ヲ一所ニ集メ試驗ニ從事ス但シ其初ニハ直ニ往テ區戸長ニ面話スト雖不都合少ナカラサルヲ以テ府廳ヨリ預リ其由ヲ布達シ後ニ檢査ニ從事セリ

一、檢査需要ノ具ハ水器即手桶三十個（不素ヨリ倉卒ニ起ルヲ以テ手桶ヲ流用スト雖井水粘付ノ患アリ故ニ後來玻璃ヲ用フルニ非レハ不可ナリ）蒸餾水及試藥等ナリ加之試藥師車代午食及其他ノ需用ヲ概シテ毎人一日金一圓ト定メ十月二十三日ヨリ日數四十二日及小使其他ノ費用概略左表ノ如シ

費目	一日ノ給	延人員	小計
試藥師	金一圓	百十二人	金百十二圓
小使	金十錢	四十二人	金四圓二十錢
藥品器械			金百五十圓
合計	金二百六十六圓二十錢		

但府廳官吏小使並人足賃ハ此限ニ非ス

一、毎日午前第八時ヨリ午後第六時迄用勤第五第六番大區井水合計二千七百六十八ヶ所許一日平均六十六ヶ所餘ニ當ル

一、井水等級表左ノ如シ

	井水	百分比率
飲水等級		
善	○	○
善	三百十六	十一、四一六餘
幾善	五百四十一	十九、五四四餘
幾惡	九百八十九	三十三、七二九七餘
惡	三百七十一	十三、四
極惡	五百五十一	十九、九〇六
總計	二千七百六十八	九十九、九九五七餘

一、右試驗ノ概略ハ飲水中尤モ人ノ健康ヲ害スルノ虞アルモノ、アムモニア、亞硝酸ノ二物ヲ檢シ差等ヲ定ルナリ乃別ニ清淨水ヲ取リ分テ十箇トシ毎箇均ク其量ヲ百分トシ「アムモニア」亞硝酸ノ二物ヲ掃ヒ各別ニ其量ヲ遞加シ逐次清水ニ加ヘ試藥ヲ注キ其呈色ノ濃淡ヲ視テ法トシ以テ飲水ヲ比檢シ善惡ヲ定ルナリ

符號	清水百分中アムモニア」ノ量	清水百分中亞硝酸ノ量
一	〇・〇〇〇〇〇五	〇・〇〇〇〇四四四四四八
二	〇・〇〇〇〇一〇	〇・〇〇〇〇九三九五五〇
三	〇・〇〇〇〇一五	〇・〇〇〇〇一四三四九七八八
四	〇・〇〇〇〇二〇	〇・〇〇〇一九〇二四四二
五	〇・〇〇〇〇二五	〇・〇〇〇二四二五五〇九六
六	〇・〇〇〇〇五〇	〇・〇〇〇二九二〇七七五
七	〇・〇〇〇〇七五	〇・〇〇〇〇三四一六〇四〇四
八	〇・〇〇〇一〇〇	〇・〇〇〇三九一一三〇五八
九	〇・〇〇〇一二五	〇・〇〇〇四四〇六五八三二
十	〇・〇〇〇一五〇	〇・〇〇〇四九〇二〇〇〇

右ノ符號ニ從ヒ最善、善、幾善、幾惡、惡、極惡ノ六等トス乃甲ハ二物比無ニシテ乙ハ符號一乃至二、丙ハ三乃至四ニシテ其水ハ濾過若ハ煮沸ヲ要スルモノ戊ハ七乃至八ニシテ再三濾過煮沸シテ纔ニ一時ノ急ニ用ユルモノ已ハ九以上ニシテ通常濾過煮沸ノ及フ所ニ非ルモノナリ

右ノ外諸種類過度ナルモノ亦善良飲水ト稱スヘカラスト雖前言ノ如ク當時ノ試驗ハ暴病流行ノ際ニ乘シ一時ノ危急ヲ救フノミ故ニ一定ノ規則トナスヘカラス若シ水ノ等級ヲ一定シ衛生ノ基本ヲ立ントスレハ其檢査ヲ精密ニセサルヘカラス果シテ然ラハ一人ニシテ一日十餘水ヲ試驗スルハ容易ノ事ニ非ルヘク淺草本所兩區ノ井數二千七百ヲ以テ推其飲十三區ノ井數ヲ平均シテ一萬五千ト假定スルモ千五百四乃大凡四年餘ヲ要スヘシ故ニ一年ニシテ其功ヲ竣セント欲セハ試藥師四人ヲ要シ其費用ハ千六百圓餘ニ下ラサルヘシ而シテ府廳ノ官員雇夫給與ハ此限ニ非ルナリ

明治十二年八月

外國藥局方製劑に注意喚起　外國藥局方に據り製したる藥品は原藥局方の異るに從ひ市場には同名異質品を生じて取扱上注意を要すべき點尠からざるを以て大阪司藥場に於ては其代表的の物として沃度鐵含利別を揭げ之を日刊紙上に廣告して一般取引並使用者の注意を喚起せり。

沃度鐵含利別ニ就テノ廣告

近來當場ニ於テ內國製造ノ沃度鐵含利別ヲ試驗スルニ佛國局方ニ據リテ製スルモノ其タ多ク即チ其百分中沃度鐵ノ量僅ニ〇・五分ナリ之ヲ英國及獨逸局方ニ比スレハ其量十分一ニ足ラスシテ隣國局方ニ比スレハ僅ニ四十分一ニ居ルヲ以テ其効力ト價格トニ於テ大ナル差異無キヲ得ス依テ自今當場ニ於テハ右佛國局方ニ據リテ製スルモノニハ百分中沃度鐵量ト檢査印紙表面ニ印記ス醫師藥舖等配劑並購求ノ際宜シク注意スヘシ

明治十一年七月

罰則內藥品試驗の追加　明治十一年二月二十二日制則內藥品試驗法の追加に關し東京、大阪、横濱及長崎司藥場宛次の如く達せられたり。

一申明治九年三月申諭則內ヘ追加相成候藥品二十種試驗法別冊ノ通相定候此旨御達候事

藥局試驗法（省略）

藥品試驗に就き各司藥場に達せられたる注意書　藥品試驗に就き衛生局より各司藥場宛次の如き注意書を達せられたり。

東京横濱長崎司藥場ヘ達（明治十一年四月十五日）

藥品ノ試驗ハ衛生事業中一大要務ニシテ醫學ト商業トノ二途ニ跨リ其關涉スル所ノ利害極メテ廣大ナルニ付試驗ノ精細ヲ要スルハ勿論醫術ノ進運ニ從ヒ西洋藥品ノ需要逐日緊切ニ迫リ而シテ本邦化學製藥學ノ進歩未至其爲奸商ノ詐術ヲ逞フセントスルモノ此時ヲ以テ千載ノ一時トナシ或ハ幽微ノ製造法ヲ用ヒ或ハ利ヲ貪ハレメナ曲ヲ覆フ等奸詐百方以テ暴利ヲ占有スルノ秋ナルカ故ニ藥品試驗ノ世ニ裨益アル亦今日ヲ以テ最緊要ノ時ナリトス依テ各自試驗ノ際必ス先ツ一定普通ノ方法ニ據リテ精細ノ試驗ヲ遂ケ萬一教師ノ處分其試藥師ノ意見ニ符合セサルコトアレハ更ニ同僚ニ謀リ彼此ノ方法ヲ用ヒテ反覆試驗シ之ヲ教師ニ

討議スヘシ而シテ尚且雙方ノ意見ヲ秩ニシ到底心服セサルコトアラハ本局ニ開申シテ禁許ノ判決ヲ取候樣可然爲心得此段及内達候也

硝酸銀キニーネ検査ノ件ニ關シ東京、大阪、横濱長崎司藥場ヘ達（明治十一年五月二十八日）

最近輸入スル硝酸銀キニーネ」ハ「キニーネ分ヲ含有スルコト甚少量ニシテ試驗法ニ適シ難キモノ頗ル多ク從テ各司藥場ヘ検査願出ツルモ速々藥用ヲ禁スルカ故ニ方今ニ至リテハ検査ヲ請ハス又其品ノ良否如何ヲ顧ミス妄リニ販賣スルノ弊有之之趣三府ニ於テハ聞則モ有之品々ニ付賣買之際特ニ注意候樣藥舗ヘ懇篤設諭可致此段相達候也

大阪及長崎司藥場條令の改正　明治十二年二月大阪司藥場教師ドワルス滿期となりたるを以て之を解職し次いで三月には東京司藥場教師プルヘ雇入期間滿了したるを以て同樣解職し東京司藥場には長崎司藥場教師ドクトル、エーキマンを轉任せしめ大阪及長崎司藥場には外人教師を置かず兩司藥場は全く外人の手を藉らず一切を邦人の手にて處理することゝなり從つて條令改正の必要を生ぜり。即ち次の如し。

衛第一七三號

大阪長崎司藥場ヘ達

去ル明治十年中其場試驗條例相違區候處今般別冊ノ通改定候條此旨相達候事

明治十二年三月十一日　　内務卿　伊藤博文

別冊

司藥場試驗條例

第一條　藥物試驗ハ醫師藥舗ノ蒙昧ヲ啓發シ好商ノ弊落ヲ防遏シ質粗ノ品類ヲ撰斥シテ醫藥ノ功驗ヲ確實著明ナラシムル要件ナルカ故ニ施行ノ際最モ戒慎精密ヲ極メ決シテ疎漏ナキヲ要ス

第二條　藥物試驗ハ總テ九等試藥師以上ニ分任シ場長ハ試驗スヘキ藥物ヲ分配シテ分析セシメ終始之ヲ監督シ其成績ヲ詳悉シテ禁許ノ判決ヲ爲ス可シ而シテ場長モ執務ノ繁簡ヲ計リ自ラ其分析ノ事ヲ執ルハ勿論ナリトス又九等試藥師以上ハ十等試藥師以下ノ者ヲ助手ト爲スヲ得ヘシ

第三條　藥物試驗ノ方法ハ未タ日本藥局方確定セサルヲ以テ舶來藥品ハ各其本國ノ局方ニヨリテ之カ品位ヲ定メ許可スヘシ又此他ノ藥品ニシテ其出所製法ヲ詳カニセス或ハ其出所等分明ナルモ必シモ其本國ノ法ニ從テハ本邦ノ製藥家及醫療上ニ不便ヲ釀ス可シト認ムルモノアル時ハ臨時場長其意見ヲ具上シ衛生局長ノ判決ヲ請ケ然ル後試驗法ヲ一定ス可シ決シテ各自ノ意見ヲ以テ區々ノ試驗ヲ爲スヘカラス

第四條　試驗濟ノ藥物願人ヘ下渡シタルモノハ毎一週日分毎品其許禁シタル譯何氏試驗法及ヒ挾雜物等並番號月日藥名商標瓶數及願人ノ住所氏名取引先等詳細記載シテ照考ノ爲メ各司藥場五ニ通知ス可シ

第五條　藥物試驗ヲ願出ルモノアル時ハ事務掛ニ於テ藥名員數並願人ノ住所氏名引取先等ヲ願書ト照査シ不都合ナキヲ認メテ預證ヲ渡ス可シ而シテ詳細受付簿ニ登錄シ且番號ヲ記シ然ル上場長ニ差出ス可シ

第六條　場長ハ其藥名商標員數番號月日ヲ帳簿ニ登記シ九等試藥師以上ヲ撰ンテ主任ト爲シ之ヲ試驗セシム可シ

第七條　試藥師ハ場長ヨリ命セラレタル藥物ヲ詳細検査シ試驗濟ノ上場長面前ニ於テ其成績ヲ明陳シテ許禁ノ判決ヲ承認スヘシ

但シ場長ノ意見ニヨリ更ニ他ノ試藥師ニ命シ再三試驗セシムルコトアル可シ

第八條　場長ハ前條ニ掲クル試驗ノ成績ヲ試藥師ヨリ具陳スルトキハ其成分反應ヲ詳細考證シ自己ノ試驗簿ニ許禁ノ次第ヲ記シテ之ヲ該主任ノ試藥師ニ示ス可シ

第九條　試藥師ハ場長ノ示シタル許禁判決ノ次第ヲ場長ノ簿冊ト毫モ違ハサル樣自己ノ簿冊ニ登記シ該藥品ト共ニ事務掛ニ送付スヘシ

但禁止ノ印ヲ貼スル藥品ハ告示錄ニ和文ヲ記載シ自己ノ氏名ニ捺印シテ場長ノ檢印ヲ受ケ之ヲ事務掛ニ送付ス可シ

第十條　事務掛ハ右ノ藥物及告示錄ヲ受取リ番號ヲ照査シ許禁並月日等ヲ受付簿ニ登記シ印紙貼付ノ手續ヲ爲シテ之ヲ願人ニ下ケ渡ス可シ

右之通相定候事

東京司藥場に和漢藥物調査會の設置　東京司藥場の有志は和漢藥物調査の爲め場員及場外研究者と相計り集會を催し討論研究を積けたり次に掲げたるは場長より衛生局長に差出したる該集會許可願及人名錄なり。

別紙記名之人員當場備品ノ和漢藥物検査之爲メ毎月一回土曜日午後ヨリ集會討論致度申出候右者同ヨリ當場事務上ニ於テ障碍無之ハ勿論且實地検査ノ功ヲ奏シ候得者場務擴張ノ一助ニモ可有之候間右集會御許可相成度此段相伺候也

明治十二年九月十五日　　司藥場長

衛生局長殿

氏名

三宅秀、柴田承桂、桂村清徳、松原新之助、下山順一郎、丹波敬三、村井純之助、佐分利秀太郎、櫻井小平太、乃美辰一、藤本理

司藥場員の衛生學聽講　明治十二年　月衛生局の斡旋に依り司藥場員は東京帝國大學醫學部に於て衛生學を聽講せしめたり之に關する文書次の如し。

今般大學醫學部ニ於テ獨國學士チーゲル氏毎週衛生學講義相開部外ヨリ希望之人ハ聽聞致サセ候ニ付當場志願ノ人ハ至急名前取調差出シ度衛生局庶務課ヨリ通知有之候筈テハ一旦聽講申入候上ハ半途相廢スルコト不成相且課官謝義差出候間右御承諾之上聽講希望之人ハ御捺印有之度此段申述候也

右に對し保田東濟、村井純之助、佐分利秀太郎、櫻井小平太、乃美辰一、藤本理、草野猪之助、藤田孝貞、山口再五郎、喜多尾元英、鵜浦有意、長尾貞行、榎並志雅三の諸氏希望申出で衛生學の聽講をなしたり。

内務省東京司藥場に酒精劑の調査を命ず　衛生局の依頼により東京司藥場に於て調査報告したる各國藥局方中酒精劑次の如し。

酒精劑

酒精、再溜酒精、ホフマン氏鎮痛液、甘汞精、甘硝石精、硫砂精、香竄性硫砂精、複方白芷精、過泥子精、芳香精、芳香硫砂精、複方アルモラシア精、カユプチ精、龍腦精、コローロホルム精、桂皮精、枸櫞皮精、山蔡菜精、蟻精、吐松子精、複方杜松子精、ラフエンジユレ精、複方ラフエンジユレ精、檸檬精、複方マスチック精、英國綿葉薄荷精、椒性薄荷精、薄荷精、ミールラ精、肉豆蔻精、迷迭香精、石鹸精、セルビールラ精、芥子精、甜菊酒精、甜菊酒精混和物、其他了幾類多數。

司藥場に於て藥品製造試驗法の傳習　明治十二年藥舖及製藥業者の藥品製造試驗法傳習出願の向に藥品持參の上諸器械は司藥場のものを貸與し製造法を傳授し製藥業の發達に資せり。

京都府藥物試驗場設立を請願す　明治九年八月京都司藥場廢止せられたる結果京都府は種々不便少なからず遂に内務卿伊藤博文宛藥物檢査場設立の請願をなしたり其請願書次の如し。

藥物眞贋良否檢査之儀ハ曩ニ明治四年三月於當會密局取扱來候然處明治八年十二月京都司藥場致設置ニ付右事業ハ於同場御調査相成候得共明治九年八月同場致廢候後最前之通於當府檢明致度同年四月醫第七十號ヲ以何出候處詮議之次第有之當分難聞届旨御指令相成候ニ付猶同年十一月醫第八十八號ヲ以再伺出候得共其後如何御指令モ無之當府下藥物業大阪司藥場ヘ更檢願出候ニテ殊之外不便ヲ極メ於當府更檢相成度申出付テハ府下藥物業罪申合今度大阪司藥場御雇人教師ドワルス氏滿期歸國之由聞及同氏ニ示談シ雇料ヲ支出シ藥物檢明同氏ニ相取扱度懇願別紙差出候事實無余儀次第候間於當府舍密上製煉藥劑ノ眞贋良否ヲ檢査致シ檢章貼用候樣仕度此段相伺候至急御指令被下度候也

尚以ドワルス氏ハ本月中ニテ滿期之由ニ付既ニ滿期ニ至レハ同氏歸航可致候付勞以至急御指令被下度此段分事申達候也

明治十二年二月十三日　　京都府知事　植村正直

内務卿　伊藤博文殿

（別紙）

藥物檢査之儀ニ付願

藥物之儀ハ人命ニ關スル至重ノ品柄ニ付曩ニ偽陳敗之品相用候テハ不容易次第ヲ以明治四年三月於御府檢明之擧御發行被爲在人民保護ノ聖旨深ク感戴仕罷在候

處當時新規ノ事於醫師藥物業賣買上手數ヲ厭ヒ物議罷在候得共幾月ヲ閲スルノ際其事ノ概要ナルヲ覺知シ漸次信徒擧テ檢明相請候ニ立至リ候處明治八年十二月司藥場ヲ府下ニ御開被爲在於同場檢明被成下倍々精密調査行屆候折柄明治九年八月同場被廢府下藥品ハ大阪司藥場ヘ更檢可願出次第ニ相成於此從來積年ノ方法一時瓦解之姿候得共能重ノ御告諭ニ付大阪ヘ受檢願出候處幾許ノ里程有之運般其他不便不利ニ付無餘儀大阪住藥物業之内御檢明章相請候品物ヲ購求候手順ニ立至リ夫レカ爲メ彼レニ利益ヲ被占從テ當府下藥物業手狹窮屈ニ相成候ニ付從前之通於當府御檢明被下度段明治九年九月上請候得共御詮議之次第有之難聞届御指料罪承無餘儀默止候得共前文之譯柄ニテ於方今愈以當府下藥物業不辨利候間何卒於府下御檢明御再擧致下度再應伏テ請願仕候自然於御府御手數難致歪寸儀候得ハ乍恐府下藥物業有志糾合シ遥遥大阪司藥場教師ニ御雇入於成候ドワルス氏此節滿期御雇止可相成傳承候ニ付同氏ヘ示談シ府下ヘ雇入給料ヲ支出シ右事業ニ令從事候爲檢明御場所ヘ可差出候間特別之御詮議ヲ以於府下檢明相成候樣致成下度此段奉願候以上

明治十二年二月四日

上京區藥物取締　上田吉兵衛
中嶋彦兵衛
下京區藥物取締　中野忠八
井上清七
川道佐兵衛

合藥會社頭取　柏原孫左衛門

前書ノ次第於當社モ懇願相在候ニ付連署上願仕候也

京都府知事　植村正直殿

右請願書に對し内務省指令次の如し。

指令（衛生局第四九〇號明治十二年三月一日）

書面何出之趣藥物業之者ニ於テ外國人雇入藥品檢査之儀ハ相互ノ示談ニ任セ不苦候條明治十年太政官第二十七號布告之通可取計事

但其府ニ於テ檢章貼用之儀ハ組聞届雇主共便利之爲メ藥品良否之證明ヲ要シ候ハヽ司藥場印紙ニ不紛樣試驗人ノ記名シタル印シヲ貼シ候儀ハ不苦候條其旨可相達置事

明治十二年三月一日　　内務卿　伊藤博文

藥品取扱規則の制定　内務省は明治十年二月十九日藥劇藥取扱規則發布後僅かに三年にして更に藥品取締規則を發布せり。右發布に關する内務省の伺書に由れば「當今司藥場檢査禁許ノ合數ヲ比例スルニ醫藥用ニ供シ難キモノハ百分中十分内外ニ居リ此歴惡不良品ハ追々間則無

之地方ニ散布致シ候ハ自然ノ勢ニテ従前ニ比スレハ一層ノ弊害ヲ蒙リ候景況ニ有之間則無之テハ取締モ難相立候故三府同様ニ施行ニ相成度段伺出候地方モ有之今日ニ及ヒ候テハ各地方一般御布令無之テハ不相成時機ニ至リ」云々とありて薬品取扱規則制定の必要急切なるを認め十一年六月二十一日内務卿より太政官に伺出明治十三年一月十七日布告第一號を以て左の如く定められたり。

布　告（明治十三年一月十七日第一號）

薬品取扱規則

薬品取扱規則左ノ通相定来ル二月十五日ヨリ施行シ明治十年二月第二十號布告毒藥劇藥取扱規則ハ右同日限相廃候條此旨布告候事

第一條　凡ソ薬品中最注意シテ精選スヘキモノヲ第一類注意藥トシ其性効峻烈ニシテ僅少ノ分量ト雖モ直チニ生命ヲ傷害スルニ足ルヘキモノヲ第二類毒藥トシ其性効第二類ノ如ク峻烈ナラサルモ用量ニ因テ容易ニ危害ヲ来スヘキモノヲ第三類劇藥トス其類目別表ノ如シ

但新ニ発見及舶来シタル薬品ハ先ツ最寄司薬場ニ出シテ試験ヲ受ケ其告示スル所ニ従フヘシ

第二條　第一類薬品ハ其性効ノ緩劇ニ拘ハラス若シ精良ナラサルトキハ醫師ノ目的ヲ誤リ以テ人命ヲ危フスルカ故ニ其粗製（故意ニ他物ヲ混シタルニアラス全ク化學製造ノ際其法疎漏ニシテ精ナラサルモノヽ類ヲ云フ）ハ之ヲ薬用トシテ販賣スヘカラス

但薬舗ニ於テ自ラ其良否ヲ鑑別シ能ハサルトキハ最寄司薬場ニ請ヒ無費ニテ其試驗ヲ受クルコトヲ得

第三條　第一類ノ粗製品ト雖モ仍ホ學術上工職上等ノ用ニ供スルニ足ルモノハ粗製ノ字ヲ其器ニ明記シ之ヲ販賣スルコトヲ得

第四條　第二類、第三類ノ薬品ハ醫師ノ處方書ニ據テ調合スルノ外醫師、薬舗、化學者、製薬者、工職者等ヨリ品名、量數需要ノ目的年月日及ヒ住所姓名ヲ詳記シタル證書ヲ以テスルニアラサレハ決シテ販賣授與スヘカラス

但證書處方書ハ之ヲ保存シ臨時ノ點檢ニ供スヘシ本條ノ手續ニ依ルモノト雖モ幼稚ノモノ其他不安心ト認ムルモノニハ一切交付スヘカラス

第五條　第二類、第三類ノ薬品ヲ販賣スルトキハ其器若クハ包紙（必ス背通ノ名稱ヲ記シ且第二類ハ毒ノ字第三類ハ劇ノ字ヲ明記スヘシ

但醫師ノ處方ニ據ラスシテ封緘ヲ開キタル第二類、第三類ノ薬品ヲ小賣若クハ授與スルトキハ本文ノ外更ニ適應ノ器ニ入レ密閉封印スヘシ

第六條　第二條、第四條本文ニ背戻シ又ハ贋品「故意ニ他ノ物品ヲ混合シテ其容量重量ヲ増スモノ若クハ他ノ物品ヲ以テ本品ニ擬シ或ハ名称ヲ變換スルモノ、類ヲ云フ」販賣スルモノハ其贋敗品ヲ没入シ三十圓以上五百圓以下ノ罰金若クハ一月以上一年半以下ノ徒役第一條但書第四條但書及第三條第五條ニ背戻シタルモノハ一四以上二十五圓以下ノ罰金若クハ一日以上二十五日以下ノ懲役ヲ科シ又ハ罰金懲役ヲ併セ科スヘシ

第七條　右ノ罰則ヲ再犯スルモノハ其本罰ノ最多限ニ二倍以下ノ罰ヲ科シ三犯スルモノハ本罰ノ最多限ニ三倍以下ノ罰ヲ科スヘシ

第一類　注意藥表

印度大麻葉及其製剤、貴著葉並根及其製剤、麥奴及其製剤、番木鼈子及其製剤、乳酸鐵、ペプシネ、吐根、吐酒石、礦砂精（アンモニア水）、ヂキタリス葉及其製剤、カラバル豆及其製剤、肝油、ヨジウム、沃度加里、沃度鐵含利別、第一沃度汞（黄色沃汞）、第一コロール汞（汞カロメル）、第二コロール汞（昇汞、猛汞、ソビルマート）、炭酸アンモニヤ（礦砂精）、老利爾結兒私水並苦扁桃水、蓖陀羅華及其製剤、藥剤巴脂並球根及其製剤、莞青（斑猫）、コロフォルム、コロラールヒドラート、格魯尖屈謨實及其製剤、格魯蓋莢實及其製剤、アトロヒネ鹽類、阿片製剤、サントニーネ、醋酸アンモニア水（ミンデレリ精）、薩爾撒根、サリシール酸及鹽類、撒那皮、規尼涅鹽類、綿馬及其製剤、硝酸銀、尖鳥答草及其製剤、燕酸セリウム、臭素加里（ブロームカリウム、臭素剤篤亞私）、ニーサル（アーテル）、鹽基性硝酸蒼鉛、ヒヨス葉及其製剤、蓖麻子油、莫爾比涅鹽類、水素還元鉄

第二類　毒藥表

横、カンタリヂーネ、クラーレ（矢毒、ウクラ）、亜砒酸（異名日砒石、礜石、アルセニッキ）、其製剤及砒抱合物（鷄冠、雄黄、雌黄ノ類）、揮發苦扁桃油、有毒性アルカロイド並其鹽類、ニコチネ、ヂキタリネ、ナルセーネ、ヴエラトリネ、ブルシネ、コニーネ、コデーネ、アトロヒネ、アコニチネ、ヒヨシアミネ、モルヒネ、ストリキニーネ等、猛劇汞剤、白降汞、第一沃汞、第二沃汞、昇汞、赤降汞、硝酸亜酸化汞、青酸汞、生生乳、青酸及其製剤

第三類　劇藥表

印度大麻葉及其製剤、貴著葉並根及其製剤、番木鼈及其製剤、巴豆及巴豆油、麥奴及其製剤、ボドクーネ、ヘルンボル根及其製剤、吐根及其製剤、吐酒石其他安質莫尼製剤、毒蔦豆及其製剤、蟇黄、ヂキタリス葉及其製剤、硫酸、カラバル豆及其製剤、寄性加里（腐蝕加里）、寄性曹達（腐蝕曹達）、芥子油及芥子精、芥汞及輕粉、汞灰散、豆丸、ヨヂウム及其製剤、沃度加里、ヨヂウム鐵、ヨードホルミウム、雙鬱菊球根（烏頭附子）及其製剤、老利爾結兒私水並苦扁桃水、ヴエラトリ根、過酸滿俺酸加里及曹達、藥剤巴脂並球根及其製剤、蓖陀羅華葉及其製剤、莞青（斑猫）及其製剤、ケレヲサート、ブロミウム（ブローム、臭素）、コロローム酸、コルシクム實並根及其製剤、コロシント實及其製剤、コロロフォルム（迷醉水）、コロトンコロラルヒドラート、コロラルヒドラード、コロダイン、コロローム酸加里及重コロローム酸加里、阿片及其製剤、亜鉛華其他亜鉛製剤、サビナ葉及其製剤、醋酸鉛（鉛糖）其他鉛製剤、サントニーネ、次醋酸銅其他銅製剤鹽化銅丹華ノ類）、硝酸（硝石精）、硝酸銀、尖鳥答葉及其製剤、臭素加里、鹽類（海鹽精、鹽化水素酸）、鹽化金ナトリウム、鹽酸重土其他重土製剤、鹽基性硝酸蒼鉛其他蒼鉛製剤、エウホルビウム及其製剤、ヒヨス葉及其製剤、石炭酸、瑞香皮及其製剤、スカンモニー脂

長崎司藥場の廃止　明治十四年七月長崎司藥場は次の如き理由により遂に廃止されたり。

内務省布達（明治十四年七月二十二日甲第六號）

今般長崎司藥場廃止候條此旨布達候事

（備　考）

衛生局第七次年報抄

長崎司薬場ハ同港輸入ノ贋薬品取締ノ爲明治九年八月中ニ設ケラレシガ同港ニテ薬品ノ貿易ハ漸ク衰微シ且ツ九州地方モ多クハ大阪司薬場檢査済ノ薬品ヲ輸送シ同場試驗ノ數ハ逐日減少シテ凡ソ東京横濱ノ二三十分一大阪ノ二百分一許ニ過キサルノ景況ニ就キ寧ロ同場ヲ廢シ其人員ト金額トヲ大阪其他ノ試薬場ニ加ヘハ便益ヲ得ンコトヲ具申ノ上裁可ヲ得之ヲ廢シ七月二十二日甲第六號ヲ以テ布達セラル

依頼試驗に制限を設く　依頼試驗の申出は日に月に増加し薬品以外の諸品の試驗も多數に及び到底是等の總てに應ずる能はざるに至りたれば爾後官廳の添書なき物は其依頼に應ずることを禁じたり。

第六九九四號

醫薬ニアラサル諸品ヲ人民ヨリ直チニ其場ヘ試驗願出候節ハ其管廳添書ノ有無ヲ檢シ添書ナキモノハ自今一切受領不致様可取計此旨相達候事

明治十四年十一月十一日　　衛生局長　長與專齋

司薬場の事務始めて外人教師の手を離る　明治十四年一月二十五日田原良純五等試薬師に任ぜられ東京司薬場詰となり東京司薬場教師エーキマンは同年五月三十日條約滿期に達したるを以て解職されたり。於玆東京司薬場も亦大阪、長崎兩司薬場同様外人教師の手を離れ全く邦人の手に移れり。

衛生事務の擴張に關する達　明治十五年二月太政官より衛生事務の擴張を達せらる。是れ即ち衛生上に關する諸物件に係る事項を廣く試驗すべきの主旨なり。依て司薬場に於ては内外薬品檢査に止まらず一般衛生試驗に主力を盡す事となりたり。

東京司薬場に於て食料品調査開始　食假の良否は國民の保健衛生上係る所頗る大にして其適否を檢し改良を計るは當時の最大急務と認めたるを以て明治十五年より東京司薬場に於て本邦人常用の食品に就き廣汎に亘つて化學分析を施行し標準食料を定め我國に於て始めて保健食料の基礎を定めたり。

薬品檢査告示箋の改正　薬品檢査告示箋は明治十四年七月一日次の如く改正せられたり。

此内彩紋　彩紋略之

日本帝國

制印

内務省衛生局

何司薬場　何司薬場之印

告示

此薬品ハ、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、ト標

記シタルモノニシテ我帳簿ニ錄シ第、、、、、、、號トス試驗上左ノ

故ヲ以テ薬用良品ノ證ヲ得ルヿ能ハサルモノナリ

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

明治何年何月何日

場長　何等試薬師　姓名　印

試驗主任　何等試薬師　姓名　印

第二編　衛生局試驗所時代

司薬場の改稱及處務權限竝章程の改訂　明治十六年五月二十一日衛生局より處務權限並章程を達せられ衛生局試驗所の事務を分ちて檢明、司薬の二部及庶務の一掛とし檢明部は大氣、用水、土壤、衣服料、飲食物、鑛泉等總て人民衛生上諸項の利害に切なるものを平素に試驗案明

し又諸官廳の依頼及人民の請願に應じ渾て衛生上に關する物質を檢査し傍ら警察及裁判に關する分析試驗を擧行し司藥部に於ては藥品の精粗眞贋を檢査し醫藥用の適否を判別し又生藥及新藥の性徴成分を發明することを掌る等凡て藥劑の檢査を施行し庶務掛は一般庶務を處理し試驗所の試驗成績書には其部長及技術主任署名捺印して事證左の責に任じ事の重大なるものは所長をして之に連署せしむることゝなりたり。改訂諸規則次の如し。

内務省告示（明治十六年五月五日甲第八號）

當省所轄東京、大阪、横濱ノ三司藥場自今左ノ通改稱可致此旨相達候事

衛生局東京試驗所
衛生局大阪試驗所
衛生局横濱試驗所

明治十六年五月四日

内務卿　山田顯義

試驗所處務權限並章程

所長ハ事ヲ衛生局長ニ受ケ所中一切ノ事務ヲ總理監督シ隨時各部ニ就テ試驗分析ヲ擧行ス所長ハ所員ヲ督勵指揮シ其分掌ヲ定メ進退黜陟ヲ衛生局長ニ具狀シ日給六十錢以下ノ雇員ハ之ヲ專行スルコトヲ得

所長ハ其管掌ノ事務ニ付キ諸官廳及外國人ト直チニ文書ヲ往復スルコトヲ得

部長ハ事ヲ所長ニ受ケ部内ノ事務ヲ幹理シ並ニ試驗分析ニ從事ス

部員ハ所長及部長ノ指揮ニ屬シ試驗分析ノ事ヲ分掌ス

庶務主任ハ事ヲ所長ニ受ケ所中ノ庶務ヲ幹理ス

掛員ハ所長部長及ヒ庶務主任ノ指揮ニ屬シ庶務ヲ分掌ス

本所ノ事務ヲ分チ二部一掛トス其分掌ヲ定ムルコト左ノ如シ

檢　明　部

一、大氣、用水、土壌、衣服料、飲食品、鑛泉等凡テ人民衛生上ノ利害ニ切ナル諸項ヲ平素ニ試驗發明スル事

一、諸官廳ノ依頼又ハ人民ノ請願ニ應シテ飲食料、用水、染料、着色料等ノ如キ運テ衛生上ニ關スヘキ物質ヲ檢査シ傍ラ警察及裁判ニ關スル分析試驗ヲ擧行スル事

司　藥　部

一、内外國藥品ノ精粗眞贋ヲ檢査シテ醫藥用ノ適否ヲ判別スル事

一、生藥又ハ新藥ノ性徴成分ヲ發明スル等凡テ藥劑ノ檢査ヲ擧行スル事

以上二部ニ於テ行ヒタル試驗ノ成績書ニハ其部長及ヒ主任ノ技術官署名捺印シ共ニ其責ニ任ス事ノ重大ナルモノハ所長之ニ連署スヘシ

庶　務　掛

一、試驗ノ功程ニ關スル諸記表ノ編製器械藥品書籍ノ保管文書ノ往復等本所一切ノ庶務ヲ所理スル事

檢査印紙告示箋等の改正　司藥場は衛生局試驗所と改稱され爲めに檢査印紙告示箋等も改正されたり。但し司藥場時代に製作したる檢査印紙並藥名標等の使用を當分の内差し許されたり。

衛生局報告（明治十六年五月十一日第三十九號）

今般東京、大阪、横濱ノ三司藥場ヲ衛生局試驗所ト改稱相成候處各場檢査印紙並藥劑藥標記ノ儀ハ改正印刷相成候迄從前ノ分ヲ使用ス此旨報告ス

但阿片容器罫紙ノ儀モ本文同樣ノ事

藥品檢査告示ノ改正

今般藥品試驗告示箋改定五百枚及下附候條自今右料紙ヲ相用ヒ從前使用殘リノ分ハ返還可致此段相達候事

但別紙雛形ニ准シ所印竝技師技手官印相用可申事

明治十七年一月十八日

衛生局長　長與專齋

次で明治十七年一月次の如く改正せられたり。

大日本帝國政府內務省

此內彩紋 彩紋略之

製印

試驗告示

第何號

一 藥名

右藥品ハ試驗上左ノ故ヲ以テ藥用良品ノ證ヲ得ル能ハサルモノナリ

、、、、、、、、、、、、、、、、、、

明治何年何月何日 所印

衛生局何試驗所

司藥部長 內務何等技師 何誰 □

檢査主任 內務何等技手 何誰 □

藥品試製所の新設 明治十六年五月東京試驗所內の製藥所を廢し更に藥品試製所を新設されたり。

全國鑛泉調査着手 試驗所に於て鑛泉分析の爲出張したる時は其鑛泉場附近の地形、環境等詳細の調査報告を命ぜられたり。即ち次の如し。

衛發第四百九十一號

各試驗所

其所員鑛泉試驗之爲メ派出候節ハ別紙之條項爲取調其都度本局ヘ申報可致此旨相達候事

明治十六年七月廿三日 衛生局長 長與專齋

別紙

一、鑛泉ノ溫度成分
一、鑛泉場ノ位置高低及方位
一、泉源ノ模樣及地水流入ノ有無
一、鑛泉場及近傍地質ノ粗密
一、同上樹木ノ多少及種類
一、同上寒暑燥濕
一、同上雨雪烟霧風向
一、同上道路及運輸ノ便否
一、鑛泉場ヨリ近接セル市驛ヘノ里程
一、郵便電信局ヘ最近ノ地名里程郵便局ハ其等級爲替取扱等ノ區別
一、該地産出ノ飲食物品名及多少
一、他所ヨリ運輸スル飲食物ノ品名及多少
一、導管及浴場構造ノ良否
一、飲水ノ善惡
一、汚水排出ノ良否
一、地方病ノ有無
一、該地戸數人口
一、浴場稼人ノ戸數
一、每年浴客ノ員數
一、飲食物宿泊料ノ價格
一、藝娼妓營業者ノ有無
一、該地周圍ノ景況及遊歩場ト爲スヘキ場所ノ有無
一、鑛泉場改良ヲ要スル條件ハ其見込ヲ立詳細復命スル事

官印制定 明治十六年五月試驗所官制々定され同年十二月技師、技手の官印を夫々規定作製せられ衛生局より分配されたり。

藥品取扱規則第二條但書中改正 藥品取扱規則第二條但書中無費の條項を削除し現在の試驗手數料制度を創定されたり。當時の關係文書を記錄すれば即ち次の如し。

太政官布告 (明治十七年九月二十九日第二十五號)

明治十三年一月第一號布告藥品取扱規則第二條但書中「無費ニテ其」ノ五字ヲ削除ス

右奉 勅旨布告候事

內務省伺 (明治十七年六月十一日)

取扱ノ改廃ヲ図ルカ為メ改正ノ特徴ヲ要スルハ必然ノ理勢ニ候處改正ノ特加ハ始ント年年免カレカタキモ改入ノ特加ニ至テ絶ラサルハ定ニ視易キ状況ニ有之故ニ多少ニ限ラス改入ヲ特改シ初メキモノハ之ヲ趨業スヘカラサルナリ宜有主管ノ亦務ニ付キ特改ノ申請ヲ為スモ慶計上ノ仰都合ニ依テ御裁可ニ至ラサルモノ寡カラス然ルニ宜有衛生局、東京、大阪、横浜ノ三試驗所ニ於テ挙行スル薬品試驗ノ手数料ヲ徴收セハ先ツ十七年度ニ於テ三万七千乃至四万四ノ新收入ヲ視即チ改入ノ特加ヲ生シ候ニ付自然特改申請ノ幾分ヲ初元候様相成歟元来右三試驗所ニ於テ挙行スル薬品試驗ノ儀ハ開港通商ノ初ニ宜リ我不孝効雅ナル業績ノ為メニ代リテ薬品ノ特和其右ヲ慶則シ以テ医師薬舗人ノ利益ヲ助クノ目的ニ出テ候儀ニ付明治七年元司薬場創設ノ時ヨリ今日ニ至ルマテ薬舗ノ出願ニ應シ無数ニテ試驗其来候處該所試驗済ノ印紙ハ漸ク世上ノ信用ヲ得其試驗印紙ヲ貼付スルモノト否トハ薬品市場ニ於テ大ニ價値ノ等差ヲ生スルノ勢ニ相成候ヨリ薬舗ニ於テハ只特試驗所ノ印紙貼付ヲ得テ利益ヲ市場ニ占メンコトヲ主トスルノ傾向ニ相成其薬品選定ノ難易ニ拘ハラス試驗ヲ出願スルモノ年ニ特加シ到底限アル技術者ヲ以テ限ナキ需求ニ應スルコト能ハサルハ勿論其前途ノ如ク射利ノ目的ニ出テ候モノ多キニ居リ候儀ニ付設早無数試驗ノ亦ヲ政府ニ負擔スルヲ要セス相応ノ試驗手数料ヲ收メ候ハ宜敷ノ儀ニシテ決シテ薬舗ノ為メニ迷惑ヲ来シ候様ノ儀ハ勿論無之哉上ハ依生物其他ノ試驗分析ノ如キモ相応ノ手数料ヲ納メ候方可哉ト存候間右手数料徴收額相定メ別紙乙號案ノ通宜有ヨリ告示致度就テハ十三年第一號布告薬品取扱規則中無数試驗云々ノ文字刪除致候間右文字刪除ノ儀申議案之通御布告相成候様致度別紙案相添此段相伺候也

別紙右略

指　令（明治十七年九月三十九日）

何ノ趣聞届候事

参　事　院　議　案

別紙内務省伺薬品試驗手数料徴收並薬品取扱規則中文字刪除ノ件稟議スル處左ノ如シ

案スルニ薬品試驗ノ儀ハ薬舗等薬品ノ特和其右ヲ慶則スル能ハスシテ質帯ノモノヲ買貫スルコトアルトキハ容易ナラサル禍害ヲ生スルノ恐有之候ニ付此禍害ヲ預防センカ為メニ薬品試驗所ヲ東京大阪横浜ニ設ケ薬舗ノ申請ニ應シ無手数料ニテ試驗ヲ許サレタル次第ニ有之候處右薬品試驗所試驗済ノ印紙ヲ貼用スル薬品ハ固ル世上ノ信用ヲ仰シ其印紙ノ有無ハ其ニ薬品ノ價格ニ多少ノ影響ヲ及ホス程ノ勢ニ相成リ薬舗ニ於テハ該試驗所ノ印紙ヲ貼付センコトヲ之レ冀ミ薬品ノ試驗ヲ申請スルモノ近来日一日ヨリ特加候ニ付テハ試驗ノ為メニ要スル所ノ費銀モ漸ク相嵩ミ候ハ必然ノ次第ニ候ヘハ今ヨリ相応ノ試驗手数料ヲ徴收スルハ不都合ノ亦ニ有之旦若干ノ手数料ヲ徴收候トモ敢早薬舗ニ於テ困苦ヲ感スル程ハ無之ニ付何御裁可ノ上薬品取扱規則第二條改正相成可給ト認定ス右ニ因リ布告並指令案左ノ通ニテ可給議上申候也（元老院議定）

左案右略

内務省告示（明治十七年十月十四日甲第三十七號）

宜有衛生局東京、大阪、横浜試驗所ニ於テ挙行スル薬品其他ノモノ検査手数料左ノ通相定メ十一月一日ヨリ徴收候様此旨告示候事

検　査　手　数　料

一、薬品一容器（一種ノ類一類）ニ付金一錢乃至五錢

但大容器ノ薬品ヲ検査シタル上小容器ニ分チテ印紙ヲ貼付スルモノハ其小容器ヲ以テ一容器トス

定規ニ告示セサルモノハ其品数ノ多少ニ拘ラス金一圓ヲ徴ス

左ノ各項手数料ハ一箇年ニ徴收スルモノトス

一、飲水及氷雪	飲料適否鑑定	金十錢乃至五錢
	定量分析	金五十錢乃至三圓
一、乳　汁	異物ナル可成的検査定性分析	金二十錢乃至一圓
	定量分析	金五十錢乃至三圓
一、酒　類	定性分析	金二十錢乃至一圓
	定量分析	金五十錢乃至五圓
一、飲食物	定性分析	金二十錢乃至一圓
	定量分析	金五十錢乃至五圓
一、大気及有毒性瓦斯類定性定量ニ拘ラス		金一圓乃至五圓
一、食器ニ有毒性金属	定性分析	金二十錢乃至三圓
	定量分析	金五十錢乃至五圓
一、衣服類		金五十錢乃至三圓
一、鑛　泉	定性分析	金五十錢乃至三圓
	定量分析	金一圓乃至十圓
一、煙　草		金二十錢乃至三圓

一、玩具其他茶色物ニ付特性色素　　同

一、化學製品　定性分析　金二十錢乃至一圓

定量分析　金五十錢乃至五圓

一、鑛物及金屬　同　金一圓乃至五圓

同　金三圓乃至二十五圓

一、藥劑及殺鼠保證品　檢査ノ顛末及之ニ要スル時日ノ長短ニ依リ　金五十錢乃至五十圓

一、前各項外ノ諸品ハ檢査ノ顛末及之ニ要スル時日ノ長短ニ依リ相當ノ手數料ヲ徴收スベシ

一、右諸品時日ヲ限リ檢査ヲ乞フモノハ試驗所ノ都合ニヨリ之ヲ許可スルコトアルベシ然ルトキハ普通檢査手數料ノ五倍以内ヲ徴スベシ

内務省達第　（明治十七年十月十三日）

藥品其他檢査手數料徴收並藥品取扱規則中文字制限ノ儀ニ付御布告案及官報告示案添通般何用御聞届相成候趣承而況遠日藥徴品ノ價値改下ノ程度ニ至リ今後ニ五錢ノ手數料ヲ徴收スル時ハ特ニ藥品ノミ高價ヲ保チ市場物價ノ平均ヲ失スル而已ナラス其種貧民病者ニ影響可致ニ付今後商況ノ變動ニ應シ手數料幾分減ジ度キ樣改定且從來外國人ヨリ藥品其他檢査願出候節ハ別紙乙號ノ通手數料徴收致來候處今日ニ至リ仍其我ノ別可相立候テハ自給外交上ニモ差障キ不都合ノ所ト存候樣以來内外國人ヲ問ハス一樣ノ手數料徴收候方可然ト思考別紙甲號ノ通改案告示致候樣此段上申候也（別紙甲號ハ十七年十月内務省告示第二十七號ヲ指シ乙號ハ九年十二月二十八日内務省達ナリ）

追テ本件外國領事ヘ通達方ハ外務省ヘ照會致候此段參考迄申候也

（參　考）

内務省ヨリ外務省ヘ通牒　（明治十七年十月十三日）

外國人ヨリ當省衛生局試驗所（元司藥場ト稱ス）ヘ藥品其他檢査願出候節手數料徴收ノ儀去ル明治九年十二月中及御通知置候處以來内外國人ヲ分タス別紙甲第二十七號告示ノ通一樣ニ手數料ヲ徴收シ來ル十一月一日ヨリ施行候樣外國領事ヘ通達方御取計相成度此段御照會候也

追テ西洋新聞ヘ英佛文ヲ以テ公告方ハ當省ニ於テ取計可申候此段申添候也

外務省回答　（明治十七年十月二十一日）

外國人ヨリ貴省衛生局試驗所ヘ藥品檢査願出候節手數料徴收ノ儀明治九年中御通知相成居候處今般内外人ヲ分タス甲第二十七號告示之通御施行相成候ニ付外國領事ヘ通達取計方從當省四一一號以テ御照會之趣致承知候省ハ先年初メテ手數料相定タル候節モ別段各領事ヘ通達致シ無之今般ノ儀モ右告示ニ止マルモノニテ來ニ茶番以テ西洋新聞ヘ英佛文公告方御取計相成候上ハ別段各領事ヘ通達スルニ及ヒ申間敷ト存候此段及回答候也

外國領何　（明治十七年十月二十八日）

今般御省甲第二十七號ヲ以テ衛生局試驗所ニ於テ施行スル試驗手數料之儀告示相成候處左之區々疑問有之候ニ付左ニ相伺候

一、右手數料ノ儀ハ人民ノ願ニ依リ試驗願出候者ノミ徴收相成候儀ニ候哉

二、人民ニ於テ願ニアラサルモ御行ノ令達ニ依リ試驗ヲ乞ハサルヲ得サルモノ例之明治九年御行乙第五十四號達ニ依リ殺鼠試驗ヲ願出ルモノヽ如キハ徴收不相成儀ニ候哉

三、前同樣醫令ノ令達ニ依リ醫令ヘ願出ルモノニシテ醫令ヨリ更ニ御行ヘ試驗ヲ依賴スルモノ例之ハ苦色粉藥等ノ如キハ前同樣徴收不相成儀ニ候哉

四、人民ノ願出ニ無之醫令ニ於テ試驗ヲ必要ト認メ試驗ヲ御行ヘ依賴スルモノ例之ハ有害品檢査等ノ如キハ徴收不相成儀ニ候哉

内務省指令　（明治十七年十一月十三日）

第一項行民ノ別ナク徴收ス

第二項何ノ通

第三項第四項第一項指令ニ依リ了知スベシ

衛生試驗制限令の廢止　試驗手數料を徴收することに改めたるを以て一般に多數の試驗を受理する目的を以て明治十四年十一月官醫添書云々の達を取消したり。

試驗願に添書云々の件

衛達第九八三號

藥業ニ非ラサル諸品ノ試驗願ハ官醫ノ添書アルニ非ラサレハ領受ス可ラサル旨明治十四年十一月十一日付ヲ以テ相達置候處自今右達取消候此旨相達候事

明治十七年九月十五日　　衛生局長　長　與　專　斎

藥品檢査告示案に關する規定の改正　明治十六年改正告示雛樣式は司藥部長兼試驗主任連署式なりしも告示案の重大に鑑み翌明治十七年十月より所長兼主任連署式に改められたり。又告示案は從來適不適共之を發行し居たりたるも適品にして印紙を貼付するものには告示案の下附は其必要を認めそのみならず之を廢止せは手數も省き務々好都合なるに鑑み明治七年十一月より之を廢止し不適品及適品にして印紙を貼付せそるものに限り之を下附することゝなしたり。其樣式次の如し。

此內彩紋

彩紋名之

大日本帝國政府內務省

割印

檢査告示

第何號
一藥名 ・・・

願人 何府縣國郡町村番地
姓 名

衛生局何試驗所
所 長 內務何等技師姓名□
檢査主任 內務何等技手姓名□
明治何年何月何日

衛生局ヨリ東京大阪試驗所ヘ通知（明治十七年十一月）

藥品檢査ノ上良品ト認メ印紙貼付ノモノニハ告示箋ヲ添ヘサル儀ニ付横濱試驗所ヨリ何出之趣ニ對シ御指令並書記掛ヨリノ通牒別紙寫之通ニ有之候條貴所ニ於テモ右同樣御履行相成度此段局長之命ニ依リ及御通知候也

横濱試驗所ヨリ衛生局ヘ伺（明治十七年十月二十四日）

外國人ヨリ檢査願出候藥品ヘ印紙貼付方之儀ニ付テハ去ル十年二月中東京司藥場ヨリ何ノ上御決判相成爾來該手續ニ基キ施行致來候處今般內外人ノ別ヲ不問一般檢査手數料ヲ收入致候御達有之候付テハ自今外國人願出檢査藥品モ內國人同樣ノ手續ヲ以テ良品ニハ印紙貼付方取計別ニ告示箋付與不致候儀ニ有之候哉或ハ外國人ニハ從來ノ通藥品ノ善惡ニ不拘告示箋ヲ付與致候儀ニ有之候哉果シテ然ルトキハ內外人共同一ノ手續ヲ履行不致テハ聊カ公平ナラサル樣ニ考候ニ付十一月ヨリ內外人共印紙ヲ貼付候モノニハ別ニ告示箋ヲ添スシテ下付候樣致度此段至急相伺候也

追伸本文ノ儀ハ諸帳簿準備ノ日數ニ無之ニ付至急御指令相成候樣致度此段添テ及上申候也

告示箋ニ關シ横濱試驗所ヨリ衛生局ヘ伺（明治十七年十月二十五日）

拜啓外國人願ノ藥品ニハ以來告示箋ヲ添サル樣致度儀何書差出候ニ付其理由並從來ノ手續ヲ左ニ開申仕候今迄外人願出ノ檢査藥品ニシテ良品ト認定候モノニハ許賣藥用ノ印紙ヲ貼付シ尙藥用良品ト認定スルノ告示箋ヲ手數料ト引替ニ下附致來候處商人ノ內情ヲ承候ニ實物ヨリハ右告示箋ヲ以テ賣買候趣ニテ商人ニ取テハ至極便利ノモノヽ由ニ候故唯今廢止候テハ一時不便ナルハ必然ニ候併シ內國商人モ同樣所望ニ候處何分今迄ハ無手數料ナルヲ以テ外人ニ一歩讓居候得共今ヤ內外人同樣ノ手數料ト相成候上ハ內人モ同樣請求候ハ亦必然ノ事ト思考候若請求セサルニモセヨ今日ニ至リ內外人之別ヲ立候ハ不公平ノ事ト存候依テ內外人一同ヘ下附相成候トキハ各所共餘程要候ノミナラス却テ印紙ノ效モ減可申被考候故ニ從來ハ印紙貼付ノミト相定度更ニ告示箋請求候トキハ右兩樣相渡サヽル成規ヲ申聞セ遮絶致度强テ願出候トキハ同物ヲ以テ各別ニ願出サセ印紙ノ方ニハ成規ノ手數料告示箋ニハ金一圓ヲ徵收候樣致度然ルトキハ一方ハ檢査手數料他ノ一方ハ印紙又ハ告示箋料ト相成些ト不都合候得共別ニ致方モ無之候必竟外人ヘ告示箋相渡候譯ハ善惡共別段ノ請求ニアラサレハ印紙ヲ貼付セサル成規故告示箋ハ至極肝要ニ有之候得共今ヤ願人ノ內外ヲ問ハス（別段御達ハ無之候得共）却テ良品ニハ印紙貼付ト相定候上ハ最早不用ト存候既ニ禁不適ノ藥品ニ印紙ト告示箋兩樣ハ重複ニ相成候ニ付印紙ノ方ヲ廢止ニ內決相成候有樣故是非共何出之通ニ御指令有之度左候トキハ其旨外人ヘ通知致度別紙通知案相添伺候也

追啓本文之通御指令相成候上ハ外國人ノ試驗受持ハ從來之儘ニ相定置候得共受付ノ番號帳簿ハ全ク同一ニ致不申テハ手數料收納ノ際ニ於テ同番號ノ證書二葉出來候如キ不都合ヲ生申候又從來差出候月報ノ如キモ品目ノ區別ノミニシテ內外人ノ區別ノ相廢度是ハ別ニ御差支モ無之候ハヽ更ニ右樣改正ノ趣他所ヘモ御通達相成度其他當所ニ於テ外國人ヘ遣候試驗濟ノ通知書モ相廢度候何分是迄ハ手數料有無ノ別有之候事故外人ニシテ日本人ノ名ヲ借リ日本人ニシテ外人ノ名ヲ借リ願出候者有之處右等ハ十一月一日ヨリ全ク消滅致シ更ニ一變可致度考候間此際殆ント全ク治外法權ヲ被ラスハ從來ノ病ト相成可申尤モ一時ハ低程紛紜ヲ生可申候得共早晚一度ハ該困難ニ遭遇候事ハ拙者豫テノ覺悟ニ候也

衛生局指令（明治十七年十月三十一日）

書面伺之通

但願人ノ都合ニ依リ印紙ヲ貼附スルノ外尙告示箋ヲ請求スルトキハ別紙ノ願出ト看做シ甲第二十七號告示檢査手數料第一項但書末段ノ金額ヲ併徵スヘシ

衛生局添明書（明治十七年十月三十日）

藥品檢査ノ上良品ト認メ印紙貼付ノモノニハ告示箋ヲ添ヘサル儀ニ付御伺出ノ趣別紙之通御指令相成就テハ外國商人ヘ通知方之儀モ御見込ノ通御取計相成可然候得共文案別紙之通御修正可有之此段局長之命ニ依リ及御通牒候也

檢査願出ノ藥品中良品ト認定候モノニハ從來印紙貼付ノ上告示箋ヲ添テ下付致來候處十一日ヨリ良品ニハ印紙ノミヲ貼付シ別ニ告示箋ヲ添ヘサル成規ニ相成

候間此段及御通知候也

追テ印紙ヲ要セス告示箋ノミヲ認マル、カ又ハ印紙告示箋共ニ願望ノトキハ其都度特ニ申出ラル、ヘシ

（別　紙）

藥品出張試驗の制を設く　藥品の出張試驗に就き大日本製藥會社は衛生局に次の如き願書を提出し聞屆けられ左の條項に依り出張試驗を施行することゝなりたり。

以書面來願上候事

當製藥會社之儀致手續御認可且御命令ヲ遵守仕其製造藥品等ニ於テハ元質相違且精製純良ニ製造仕候儀ニハ御座候共現場御巡檢願度依テハ御局ヨリ日々御主務官御派出之上元質及製品等御檢査被成下適應ノ品ハ當會社内御出張所ニ於テ直チニ御檢査濟之印紙御貼付被成下候樣仕度候

右者特別之御詮議ヲ以前叙御採用被成下度此段奉願上候也

明治十七年十二月九日

大日本製藥會社々長　新田誠丸

内務省衛生局長　長與專齋殿

書面願之趣聞屆候事

但詳細之手續ハ當局東京試驗所相達スヘシ

明治十七年十二月十八日

衛生局長　長與專齋

大日本製藥會社

今般其社製藥原質並製品檢査トシテ當所員出張候ニ付別紙之通手續相定候間其旨承了可有之此段相達候事

明治十七年十二月廿五日

衛生局東京試驗所

別紙

次日本製藥檢査出張手續

今般該會社ヨリ當所員出張ヲ請ヒ諸製藥元質並製品等檢査シ適應ノ品ハ直チニ出張先該會社内ニ於テ檢査濟之印紙貼付ノ儀願出御許可相成候ニ付右出張檢査ノ手續左ノ通相定候事

一、技手ハ司藥部長ノ指揮ヲ受ケ會社ニ出張シ藥品ノ原質及製藥ヲ檢査スルモノトス

一、司藥部長ハ事務ノ都合ヲ見計ヒ時々會社ニ至リ出張技手ノ檢査スル所ヲ監査スヘシ

一、庶務掛員ハ庶務主任ノ指揮ヲ受テ會社ニ出張シ出張技手ヨリ製藥檢査濟ノ通知ヲ得テ印紙ヲ貼付スルモノトス其藥品多數ナルトキハ會社員ヲシテ便宜幇

助セシムルコトアルヘシ

一、試驗用諸器械運搬費及其他出張費等臨時支出ヲ要スルトキハ會社ヨリ辨償セシムヘシ

一、檢査手數料ハ總テ成規ニ從ヒ徵收シ其金員ハ該會社ヨリ直チニ當所ニ納メシムヘシ

右之通候也

藥品試製所及藥草試植園東京試驗所に合併　内務省直轄藥品試製所及藥草試植園は何れも明治十八年東京試驗所に合併せられたり。

藥品試製所

藥草試植園

今般其場(園)之儀東京試驗所ニ附屬セシメ一切ノ事務該所長ニ於テ監督指揮爲致候條自今衛生局東京試驗所附屬藥品試製所(藥草試植園)ト稱スヘシ此旨相達候事

明治十八年九月二日

衛生局長

文部省より合併されたる藥草試植園は小石川區戸崎町にあり多數の藥草を試植し其栽培收穫等を試驗し藥草栽培者の指導に從事す。司藥場は二等技手村井純之助に園長兼務を命じ鋭意藥草栽培に力を致し翌十九年には多量の生藥を收穫し是等は相等價格を以て大日本製藥會社へ拂下げたり。其主なる物を記載すれば次の如し。

一、ベラドンナ葉	六十七貫匁
一、ヒヨス葉	百十貫匁
一、ヂギタリス葉	三十七貫九百匁
一、アプシンチウム	四十七貫匁

河豚毒成分の研究開始　明治十八年衛生局東京試驗所に於ては所長田原良純によりて河豚毒藥成分の研究を開始せられたり。

藥品試製所の廢止　明治十八年東京試驗所に合併されたる藥品試製所は同十九年廢止となり同試製所跡には東京試驗所隣接の牛痘種苗所を移し同所跡の土地建物一切を東京試驗所に移管の結果敷地擴張せられ加ふるに三階建試驗室の一棟を新築し瓦斯火の使用を開始する等内容外觀益々充實せり。

處務權限並章程の改訂と衛生參考館の新設　明治十九年三月試驗所處務權限並章程更訂せられたり。其結果所長の權限擴張せられ檢明部を

生理、病理、化學の三科に分ち渾て衛生上の利害に關する諸項を試明することと爲れり。然して同時に試驗成績書には所長及主任技術官署名捺印することに定められたり。又衛生局東京試驗所に衛生參考館を置き衛生學的試驗品、器械及書籍等を陳列し公衆の參考に供することと爲したり。其條文次の如し。

衛局第一四八號

處務權限並章程變更

明治十六年五月相達置候衛生局試驗所處務權限並章程自今別紙之通更定ス此旨相達候事

明治十九年三月十六日　　衛生局長　長與專齋

別紙

衛生局試驗所處務章程

所長ハ事ヲ衛生局長ニ承ケ所中一切ノ事務ヲ督シ臨時試驗ヲ舉行ス

所長ハ所員ヲ督シ其分掌ヲ定メ進退點涉ヲ衛生局長ニ具狀ス

所長ハ其管掌ノ事務ニ付諸官廳及外國人ト直チニ文書ヲ往復スルコトヲ得

所員ハ所長ノ指揮ニ屬シ試驗分析ノ事ヲ分掌ス

庶務掛ハ事ヲ所長ニ承ケ所中ノ庶務ヲ擔任ス本所ニ於テ取扱フ可キ事務左ノ如シ

一、諸官廳ノ依頼又ハ人民ノ請求ニ應シ大氣、用水、土壤、衣服料、飲食品、鑛泉等衛生上ニ關スヘキ物質ヲ檢査シ傍ラ警察及裁判ニ關スル分析試驗ヲ舉行スル事

一、藥品ノ精粗眞贋ヲ檢査シ醫藥用ノ適否ヲ判別スル事

一、生藥又ハ新藥ノ性體成分ヲ聲明スル爲メ藥劑ノ檢査ヲ舉行スル事

一、試驗成績書ニハ所長及主任ノ技術官署名捺印スル事

一、庶務掛ハ試驗ニ關スル諸記表ノ編製、器械、藥品、書籍ノ保管文書ノ往復等本所一切ノ庶務ヲ處理スル事

一、東京試驗所ニハ前條ノ他ニ檢明部ヲ置キ生理、病理、化學ノ三科ニ分チ渾テ衛生上ノ利害ニ切ナル諸項ヲ試驗聲明スル事

一、東京試驗所ニハ參考室ヲ置キ衛生學理、試驗品、器械、書籍ヲ陳列シ參考ニ供スル事

追加（明治十九年三月十五日）

一、東京試驗所ニハ藥草試植園ヲ置キ藥草ヲ試植スル事

第一版日本藥局方の公布

明治十九年六月待望の日本藥局方愈ゝ成り公布せられたり。

内務省令（明治十九年六月二十五日第十號）

日本藥局方別冊ノ通創定シ明治二十年七月一日ヨリ施行ス

（別冊）日本藥局方（省略）

藥品取扱方之儀に付伺

左記藥品の取扱方に關し次の如き應答ありたり。

第四〇二號

明治十三年第一號公布毒藥劇藥取扱規則ニ據リ左記ノ藥品當地藥舗ヨリ取扱方ノ儀ニ付申出候間東京、横濱試驗所ヘモ及照會候處別紙寫ノ通回答有之候處左記來書之通少ク意見之異ナル品モ有之候得共何モ同規則第何類ニ屬シ爲取扱可然哉何分ノ御指揮相成度此段相伺候也

明治十九年十月廿一日　　大阪試驗所長　村橋次郎

衛生局長　長與專齋殿

（別紙）

	東京	横濱	大阪	
チュボイジン	非	非	非	
硫酸グッリン	非	非	非	
單寒酸カンナビン	非	ナシ	劇	
レソルシン	劇	ナシ	劇	
鹽酸エゼリン	非	非	非	
硫酸エゼリン	非	非	非	
水銀蝋	劇	ナシ	通	當所ニ於テハ辰砂同樣ニ取扱
コトシン	通	通	通	汞灰酸藍丸同樣ニ取扱
水銀	通	通	劇	局方實施前ノ取扱
亞硝酸アミール	劇	劇	劇	
ナフタリン	劇	ナシ	劇	